

---

# 探偵クン ~ looking for the bear ~

いのり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探偵クン \ looking for the bear \

### 【Nコード】

N5258N

### 【作者名】

いのり

### 【あらすじ】

白坂高校三年で随一の秀才、小守悠介。彼はときたま生徒たちから依頼を受け、学生ながらも独自の捜査を敢行する。今回、久々にやってきた一人の生徒は「あるもの」を探してほしいと依頼してきたが……

## プロローグ 「秀才と校長とストーカー娘」

白坂高校の四階の空き部室にとんでもなく頭のいい人間が住みついている。なんて噂が浮上したのは一年ほど前の話だ。当時は一体どんな秀才がいるのかと生徒たちが総じて気にした大事件だったが、今となってはただの共通認識に成り下がった。年を越えてまで騒ぎ立てるような人間などそういない。この高校も、そんな一般的な生徒がほとんどだった。

ときは五月半ば。中間試験を二週間後に控えた放課後に、その四階の空き部室で一人黙々と勉強をしている男子生徒がいた。名前だけだが、すっかり有名人になった彼は、人込みを嫌い、こうして廃部になったとある部室を占拠してノートと小一時間睨めっこを続けている。

彼が作り上げた、ペンを走らせる音しか響かない空間をぶちこわして入ってきたのは、白坂高校の校長である小早川聡だった。

「入るぞ！」

扉を荒々しく蹴飛ばしたかと思いきや、閉めもせず足早に目的の人間の元へと足を運んでいく。小さな風で飛ばされてしまいそうな細い白髪を乗つけた初老の人間だった。とてもじゃないが、徳を持つ人間がする行為とは思えない。

「おい、こっちを向け！」

部屋の奥付近をまるで社長のようになぐらと使っていた男子生徒は、計算式を途中でストップさせ顔を上げた。そこにいたのは、当然のように耳までかかっている髪に、眼鏡も掛けず幼げな顔立ちをして学年一位をキープする学生だった。彼の机の上には、自前で用意したライトスタンドまで置かれている。

「まず髪を切れ！ それにお前、校則違反とわかって休日にイヤリングしてるだろ？ 今にこの学校から追放してやるから覚悟しとけ！ それからな」

彼の諸所を指さしては不満を吐きだしていく校長は、日に日にたまっていったストレスを全て発散したかのような深い息づかいで、一人の男子生徒に対する文句を言い切った。

「わ、わかったか……？ 次回まで……に、直さ、な、かったら……即刻この学校から」

「一年前からずっと、何度も何度も、同じようなセリフを聞き続ける俺の身にもなって下さいよ。もう飽きました。ホントに飽きました。はい」

そう言つて、うーんと背伸びして体をほぐす礼儀のなっていない男子生徒を、さらに校長が罵る。

「飽きた？ 嘘をつけ、お前はみたいな人間が将来のさばるんだ。大人しく自分を改めろ！」

そしてまたさらに言い寄ろうとしていたが、

「もういいですよ。明日、散髪行つてきますから」

「それだけじゃ駄目だ。イヤリングの跡とそのだらしない服装もなんとかしろ」

さらに指で指定しながら校長は批判を並べた。だいたいイヤリングなら、耳たぶにほとんど跡が付かないはずなのだが

つまるところ、それほど校長は目ざとい人間なのである。

男子生徒の服は学校指定の紺のブレザーだ。シャツの上にはネクタイをつける決まりだが、そのネクタイの形を上手く崩して着用していた。

「はい。わかりました」

「これだから頭がいいやつは嫌いだ。嘘ばかりつく。どうせ明日散髪なんか行きやしないだろ？ お前が通っている美容院は火曜が定休日だろう」

「ご存じだったんですか。光栄です」

男子生徒はにこやかに笑い、椅子から立ち上がって片手を差し出した。

「ふん。猫かぶりの生徒なんぞに付き合つてられるか！」

その手を見向きもせず踵を返した小早川の背中に、男子生徒が問いかける。

「小早川校長。校長がここにいらしたのはそんな些細な文句を垂れるためじゃないんでしょう？」

扉を片手にぴたりと立ち止った校長は、つま先だけ廊下に出ていた左足をひっこめて乱暴に扉を閉めた。

「お前のような生徒は持ちたくないものだ」

「歳をとれば、そりや物忘れも多くなりますよ。どうかお気を落とさずに」

男子生徒は腰をおろしながら校長をなぶる。

「警告だ。お前の本来の目的を忘れてもらっちゃ困るんでな」

向き直った校長は今までは打って変わって。肅々と明言する。

「なんのために廃部になった部室まで自由に使わせてやってると思う？ これ以上、生徒たちの妙な私情に首を突っ込むつもりなら、卒業証書は渡さんぞ」

そんないまさらの告白。それを鼻であしらおうとする男子生徒は、勉強を再開させながら校長の相手をする。

「俺が小早川校長先生から与えられた使命はこの学校の偏差値を上げることです。そのために頑張って勉強していまーす。だから邪魔なんでそろそろお帰りいただけませんかー？」

「ふざけた口を利くな。高校三年にもなって突然の退学 親御さんはさぞかし悲しむことだろうな」

「俺の家族は飼っているハムスターだけなんで御心配には及びませんが」

なにもかも知ってるくせにと、男子生徒は強くペンを握りしめた。

「お前の目的はそれだけじゃないはずだ」

「わかってます。そのために俺自身の勉強は必須なんです」

少し色濃くなったペン先で計算を続ける。心なしに男子生徒の解答スピードが向上しているようにも見える。

「もう一度言っておく。お前がまず第一にしなければならぬこと

はだな」

そのとき、校長の後ろにあつた扉がばんと開かれ、一人の学生が飛び込んできた。

「こもりせんぱーい！　かなり遅れてすいませーん！　今日も勉強教えてもらいに来ましたあ！」

濡れに濡れたショートカットの髪の子が、同じくびしゃびしゃになった体操着姿で室内に転がり込んできた。校長は後ろから扉に激突されて、なおかつ、倒れ込んだ際に床と正面衝突してそのまのびてしまった。

小守という男子生徒はしげしげとその女の子を見つめる。

「なんでそんなに濡れてんだ？」

「はい！　陸上部の練習が終わってそのまま参りましたあ！　それに最近気づいたんですけど、私は体操服で勉強したほうが燃えるんです！」

一人熱くなる女の子の熱気で室温が上がった。

「もえる？　どっちの？」

小守の何気ない質問に、女の子は汗だくになりながら「え？」と声を漏らした。

「いやなんでもない」

うつつを抜かしかけた小守は、自分を反省して椅子に腰かけなおした。「それにしてもなんかあつついなこ……」と、ずれているネクタイをさらにずらしてみる。

「燃えてきた燃えてきたあ！　今日はすつごく勉強できる気がする！」

四方八方に叫び散らす女の子は、折りたたんで壁にもたれかかっていたパイプ椅子を引っ張って来て、小守の正面を陣取った。

「今日も苦手の数学をお願いします！」

ぶんと音を立てそうなくらいの勢いで頭を振り下げる女の子から飛び散った汗が、勉強中の小守のノートや制服、さらには顔や髪にまで降りかかった。

「……三つ、言いたいことがある」

小守は、いたるところにかかった汗を拭きたい気持ちでぐっと抑えて口を開いた。

「はい！ 予習・復習・総復習の三点ですね！ 肝に銘じています！」

「いやそうじゃなくて」

小守はため息をついた。それから、体操服の上から水をぶっかけられたような女の子に向かって、一つずつ丁寧に享受させていく。「まずひとつ。どうして勉強するのになんにも勉強道具を持っていないんだ？」

「あつ！」

女の子は体のあちこちを触っている。汗はいくらでも滲み出ている様子だが、どこからも勉強道具は出てこない。

「じゃあふたつ目。後ろにある物体はなんだ？」

「後ろ？」

女の子は首だけを捻った。すると床に、死体のように転がっている誰かの姿を捉えた。

「きゃああああ！ 密室殺人だああああああ！」

「違う！ お前がさつき扉でぶっ飛ばしたんだ！」

彼女の金切り声に反応した小守は、思わず椅子から立ち上がる。

「あれは小早川校長だ。背中と前頭葉を打っただけで死んじゃいなと思うけど、停学処分くらいにはなるかもな」

「そ、そんな、私っ、小守先輩と会ったために学校に来てるのに……」

おどおどと辺りに目を配る女の子だったが特に対応策は見つからず、座ったまましゅんと肩を落とした。

「落ち込んでるとこ悪いがみつっ目だ」

「なんでしょうか？」

小守はしばらく女の子の顔見つめていた。それから、幽霊が人間に取りつこうとでもしているかのように、段々と女の子に顔を近づ

けていった。

「な、なんですか？ キスならもつとデートを重ねたあとに……」  
顔を赤らめる女の子をよそに、小守は至近距離で目をつぶった。

（な、なに？ 先輩がこんなに積極的だなんて初めて。緊張するっ……！）

女の子は勇気を振り絞って目を閉じた。それから五秒もしないうちに、小守は目を見開いて一言呟いた。

「お前、汗臭いからさっさと着替えてこい」

そして顔を引っ込め、小守は一仕事終えたようにして椅子に浅くもたれる。

「だいたいそんな濡れた格好じゃあノートや教科書がふやけるぞ？ それに燃えているより冷えていたほうが冷静になれるし勉強も頭に入りやすいから、やっぱり着替えてこい。あまり気は進まないが勉強なら少し付き合ってやるよ」

満足げな顔をする小守に対し、女の子は涙ぐんでいる。

「あ？ どうした、さっさと勉強道具をだな」

「せ、先輩のバカあ！」

汗だくの平手打ちを食らった小守は真横に吹っ飛び、轟音とともに掃除用具入れのロッカーに全身を強打した。「がつ！」と声を漏らして気を失った。

それから約一分後、小守は頭を押さえつつおもむろに立ち上がった。

「くっそ、いつてえな……んだよ、せっかく勉強教えてやるつつうのに」

部屋の扉は開け放たれたままになっていた。さっきまでの騒がしさが嘘のような空間だ。嵐のような少女はどこかへと消えてしまっただけらしい。

「ゴホッ！ ご、ごもり。話は聞かせてもらったぞ」

廃棄処分されそうなほど全身ホコリまみれにした校長が意識を取り戻し、額に手を当てて立ち上がった。



「成績が悪い生徒たちに優しく丁寧に勉強を教えていくのが小守、学年一位であるお前の使命だろう！ さっきのを聞く限り、即刻退学処分だな！」

いやおうなしに嘲笑する校長に小守が反論を投げかける。

「ああ、氷川夏美のことですか？ あいつはいいいんですよ。しつこいうえに全然成績が上がらない厄介な奴なんです。それよりも、俺に勉強を教わろうとする生徒たちが激減した原因を作ったのは校長、あなただったじゃないですか？」

うっ、と息が詰まったような声を上げる校長をさらに言及する。

「前にも何度か警告を受けて、ついに俺が停学処分になったときあったじゃないですか？ 勉強を教えている最中にちよつと聞いた相談事を解決しただけで停学っておかしくないですかね？ 停学のレッテル貼られてからは、俺に近づく人間なんてほとんどいなくなりましたよ」

だからと言って、校長も黙っちゃいない。

「で、でもだ！ お前がけしからん恰好をしてもなおこの学校にいられるのは、生徒たちに勉強を教えるという私との約束があるからだろう！」

白坂高校は、人一倍身なりや風紀に精力を注ぐ学校だった。といってもこの小早川校長に代わってからの話だ。つまり、身だしなみを整えようとしない小守は、いくら成績が良くても校長にとってお邪魔虫でしかないのだ。

校長の真似事ように額に手を当てて考え耽る小守は、ふと思い出したように訊いた。

「あ、そういえば去年学内でやった模試の結果はどうだったんですか？ 俺がまだ放課後忙しく勉強を教えていた時期だったんで、もし効果があつたなら全体的な偏差値は上がっているはずですけど？」

校長は銃で胸を貫かれたと言わんばかりの形相をしてから、わかりやすく息をのんだ。

「どうなんですか？ あ、もしかして、偏差値ぐつと上がっちゃい

ました？」

焦りで徐々に汗ばんでくる額を今一度抑えて、校長は怒鳴った。

「そんなもんは知らん！ 勝手にしろ！」

わざとらしく足音を立てて校長は廊下に出ていった。遠ざかる足音を耳にした小守は、校長を出しぬけたことを密かに確信した。

## 依頼人、白河綾

決して勉強が好きというわけではないが、小守は幼いころから勉強することをたたきこまれてきたため、すぐには家に帰らず、できるだけ長く学校に残り宿題や予習復習に身を投じている。日が半分ほど沈みかけた赤褐色の夕方、四階の空き部室に突入してきたのは、例によって小守の追っかけである一人の学生だった。

「せんぱーい！ テストが近いんで数学を教えてくださいー！」

毎回扉を壊しそうになるほど押しあけるので、小守は夏美の成績よりも扉の寿命を心配していた。夏美は夏美で昨日の教訓を踏まえ、てか、きちんと制服を着用していた。

「ほらっ、私完璧じゃないですか！ 思い切って夏服で勝負することにしましたっ」

肩に掛けているバックをたたいたり片手でショートヘアの髪をなびかせたりとせわしない夏美を一瞥し、小守はまた教科書と向き合い赤ペンで自己採点を続けた。

「あれ、先輩なにやってるんですか？」

「見てわからないのか勉強だ。テストが近いからな」

キュッキュツと丸をつける単調なリズムが響く。ノートを一枚めくった小守は最後の問題にはなまるマークをつけて赤ペンを軽く放った。

「よし」

「やっぱり先輩は凄いです。数？の問題集完璧じゃないですか」

夏美がノートを覗き込むと、機械のように綺麗な字で書かれた解答の上にはなまるマークが花を咲かせていた。

「まあ今回の範囲だけの話だけだな」と小守は謙虚に返し、ノートを閉じて大きく背伸びをした。授業中も含めると十時間ほどほぼぶっ通しで勉強をしていたのでさすがに疲れていた。

パイプ椅子をずるずると引きずってきた夏美がちょうど小守の真

正面に座りこんだとき、学年一位の秀才はさつと勉強道具を鞆に滑り込ませて席を立った。

「あれ？ 勉強は？」

「今日は終わりにする。解散していいぞ」

呆然とする夏美の横を通り過ぎていく小守。

「き、昨日は教えてくれるって言うてたじゃないですか！ なのになんで」

「昨日は校長がいただろ。せめて勉強を教えてやるつつう意思を示そうと思っただけだ」

床にへたり込んだ夏美が小さく「そんなぁ」と言っつうなだれた。「私も先輩みたいに頭良くなりたいです！ 勉強を教えてください！」

気迫で呼び止めようとした夏美を振り返ることなく小守が口にする。

「二十、十二、十一、八、五」

「な、なんですか？」

淡々としたカウンtdownのようだったので、怖くなった夏美は半歩後ずさった。

「わからないのか？ お前自身のことなのに」

「私自身？」と言っつて考え込んでから「あつ、もしかして」

扉のノブを捻った小守は鬼の形相で振り返る。

「お前が期末試験でたたきだした成績だ！ 俺が必死こいて教えてやった数学がたった『五点』とはどういうことだよ！ やる気失せるだろ！」

一年ほど前から一方的にやってくるようになった夏美に勉強を教えていた時期は確かにあった。しかしまったく成果が上がらないため、小守は高校三年にあがった今、成果が出ないこの女子生徒をとつう見限ろうとしていた。

「学年最下位をキープするなんて親に申し訳ないと思わないのか？」

夏美はぼそぼそと小さな声で言い訳する。

「いやあの……私ちゃんと勉強してるんですよ？先輩に言われた通りのやり方で数学の同じ問題だけずっとやりました。そうしたら取れたんですよ、五点も！」

「ほかの問題も解け！基本問題だけでも六十点は取れる教科なんだぞ！」

「す、すいません。テスト中だったんですけど、先輩から教わった問題解き終わったらすぐに寝ちゃって。でも追試はちゃんとできたんだから許して下さいよ！」

夏美は部活をさばらない癖がある。いやそれが普通なのだが、成績のことを考えるとおちおち陸上部で運動に呆けている暇などないはずだ。それが裏目に出ていたらしい。

「もしかして、自主練ってやつか？」

「はい。先輩から教わった問題が解けるようになったのが嬉しくて嬉しくて仕方なかったんです。テスト前だったんですけど、夜道を走らずにはいられなかったんです」

願うような手と手の握り方をしてぶらりと腕を垂れている夏美は黙り込んでしまった。夕日の逆光がより一層、彼女の悲しみを際立たせる。

「わかったよ。わかったから、もうわかったから」

小守は夏美に歩み寄り、そつと肩に手を置いた。

「今日は俺が都合悪いんだ。つっても勉強のしすぎだけだし、明日の朝でも放課後でも付き合ってやるから、好きな時間にここに来い」  
夏美はゆっくりと顔を上げた。

「いいんですか？」

「これで成績が上がらなかったら、追放するからな」

優しい先輩に感動して涙ぐんでいた夏美だったが、それに横やりを入れる音が室内に侵入してきた。

「すいま、せん……？」

ぎいいと怪しい雰囲気醸し出して誰かが部室の扉を開いた。十

センチほど開いたところでひょっこりと顔が出てくる。長い髪がゆらりと揺らめいて扉からはみ出ていた。そして室内をじつくりと確認した誰かは、向き合っている二人を見つけて目を伏せた。

「あつ、だだだ、だめでしたね。ごめんなさいごめんなさい！」

そのまま誰かは走り去って行ったので、小守はわずかにあいた扉に向かって叫んだ。

「ちょ……違います！ 待って下さい！」

いい感じの恋人のように見えたのだろうと思った小守は、涙ぐんで心ここにあらずの少女を放り出して、誤解を解くために廊下を疾走した。

？

警官が逃亡犯を引き立てるようにして、小守は誤解を解きながら、その女子生徒と一緒に部室に戻ってきた。彼は掴んでいた女子生徒の手を離さずに、先ほど夏美が使っていた席まで連れてきて座るように促した。しかし、なにかに脅えている様子で確かめるように椅子に腰をおろした女子生徒は、すぐに目を伏せたまま石のように動かなくなってしまった。

小守がその向かいに座わり、夕日の光を背中に浴びながらその女子生徒に質問した。

「えっと、俺になにかご用で？」

その一文字一文字にびくびくしながら、女子生徒は息を呑んだ。

「その前に先輩、なんで連れ戻してきたんですか？ 今日にはもう帰るんじゃ？」

「お前は黙ってろ」

邪魔をするなと手をかざして指図する小守。夏美はむくれてそっぽを向いた。

「勉強なら教えますよ。あなたのような人ならいくらでも」

「あ、ありがとうございます」

少し相好を崩した女子生徒に、小守は笑顔をふりまいた。

「教科はなんですか？ 女の子が苦手な数学から地理日本史世界史、さらには物理化学生物、英語まで揃って」

「ちよつと待つてください！」

部外者のような扱いを不服に感じた夏美が、座って小さくなっている女子生徒の隣まで堂々と歩み出て、大声で怒鳴った。

「だから、邪魔をするなって」

「どこの馬の骨とも知れない怪しげな生徒に私の先輩は譲れません！」

夏美は了承も得ずに学年一位の大先輩を私物化した。小守はいい加減あきれたような顔している。しかし夏美の発言で気づかされのか、女子生徒はいきなり起立をした。

「さ、三年A組から来ました、白河綾です！」

いきなりの自己紹介を終えると、綾は緊張からか硬直してしまった。隣にいた夏美が不思議そうにその顔をのぞき込む。すると綾の表情は完全にこわばっていた。

夏美がいたずらに綾の肩をたたく。瞬間に綾は飛び跳ねそうなくらい身を震わせた。

「あ、はい！ 結構前ですけど友達が噂してて、勉強以外のことも相談に乗ってくれるという話で、それでそれから、相談がありましたここに来ましたよろしくお願いします！」

綾は素早くお辞儀した。

「相談？ 勉強以外で？」

「あ……もしよかったら勉強も教わりたいんですけど、その前にその、少しだけ相談を」

「なんて厚かましい女なの！？」

夏美が驚嘆する。今日初めてやってきた白河綾のほうが一学年上のはずなのにそんなことはお構いなしにずばり口にした。

「いいですよ。どんな相談ですか？」

小守の懐の広さに夏美が茶々をいれる。

「そう簡単に受け持つちゃいけませんよ先輩。いつもいつもいろんな人からの相談に乗ってきたから今の今まで、校長先生に文句つけられてたんじゃないんですか？」

言われた当の本人は「いーんだよ」と口にして夏美を相手にしなかった。

そのとき一瞬、小守は夏美に素敵な笑顔を見せていた。

「も、もう！ 勝手にして下さい！」

ほんのりと顔を赤らめた夏美が部屋の隅っこの方でうずくまった。誰にも顔を見られないように二人には背中を向けている。

「さ、邪魔者はいなくなりましたし、どのようなご相談で？」

「はい、あの……」

一呼吸入れて息を整えたのち、綾は初めて、小守を直視して訴えた。

「クマのぬいぐるみを、探していただきたいんです」

今日、小守の帰り際に転がり込んできた女子生徒は、勇気を振り絞った影響からか少しばかり目を潤ませていた。

久しぶりにきた生真面目な相談事に、小守は瞳を光らせた。



## 詳細と報酬

あくる日の朝だった。

生徒たちがまだ誰一人として登校していない早朝から校門に近づいてきたのは、学校一の天才と謳われている小守悠介だった。優等生らしく読書をしながら体一つ分だけ開いている校門をするりと抜けていく。校庭から見える職員室にはまばらに先生がいるが、彼の存在に気づかないことも多い。読書日和の晴天だなと彼は一人心躍る気持ちで四階の部室へと足を運んだ。

ゆつくりと扉を押し開けると、なぜか既に先客がいた。

「小守先輩、おはようございます」

普段から小守が座っている席に腰をおろしていた生徒はさつと立ち上がり、恭しくお辞儀をした。しかも誰がどう見てもあの氷川夏美だった。

「早いな。どうかしたのか？」

「やだなあ先輩」。昨日約束したじゃないですか。数学を教えてください」

「ああ」

小守の視線は終始本に向けられていたが、それもお構いなしに夏美は席から離れて、先輩の指定席でもある椅子まで誘導した。

彼はひとはだに暖められた椅子に腰を下ろす。

「こんな朝早くからすまないが、勉強を教えるのはもう少し待ってほしい」

「どうしてですか？」と夏美は言いながら先輩の向かいに席を構えて座った。

「勉強よりも優先すべき人間が来るからだよ」

そのとき、まるで打ち合わせでもしたように部室の扉が動いた。次第に見えてきたのは、昨日相談に来ていた、あの白河綾だった。

「お、おはようございます」

部室に入って来たはいいが居場所がない綾に、小守が立てかけてあるパイプ椅子を持ってきて座るように促した。

「ちよつと先輩、どうしてあの女が？」

「昨日は時間がなくて相談に乗れなかったからな。今日の朝になったんだ」

「そんなこと、私一言も聞いてないんですけど」

多少なりと不満を交えた視線を送る夏美の隣に、綾が座った。

「すいません、お時間とらせてしまつて」

その後輩の夏美にも敬語を使う綾に、小守は「気にしないで」と微笑んで見せた。その笑顔が乗り移ったかのように綾も少し微笑んでいた。

「先輩の相談事は私の相談事です。私もここにいますからね」

夏美は頑としてその場から動こうとしないので小守は諦めて相談内容に移ることにした。

「じゃあ早速。確か、クマのぬいぐるみを探してほしい、でしたよね？」

「はい。ちよつとこのままだとまずいので……」

綾は自信がなさそうな顔をしてゆつくりと話した。

「私、実のところ勉強する暇もないほど忙しい生活をしてるんです。あつ、習い事が多いって意味です。水泳から始まつて、歌の練習、英語塾、ピアノ、バイオリンと息つく暇もないほどです。母が私にいろんな知識を詰め込もうとしてるんですよ。おかげで高校受験の際、有利になつたりしたんですけど、そんなある日にクマのぬいぐるみを失くしてしまいました」

「それはいつごろ？」と小守が質問を挟み入れた。

「えつと、先週の月曜日だから……だいたい一週間前です。ピアノ教室から家に帰る途中で落としてしまつたらしいんです」

小守はルーズリーフにメモを取りながら耳を傾けている。

「もうすぐ弟の誕生日でして。中学三年生なんですけど、なにかプレゼントをと思つてピアノ教室の帰りに近くのお店をはしごしたん

です。でもあいにく夜の九時を過ぎていたのでほとんどのお店が閉まってて、どうしようかなと焦っていた矢先、見えた一軒のお店が目止まって、そこでプレゼントするクマのぬいぐるみを買ったんです」

記憶を思い返すようにして語る綾に、小守がまた質問した。

「失くした場所に心当たりは？」

「それが、よく分からないんです。ふと家の前に着いたとき失くなくなっていることに気づいて……ピアノ教室は月曜日だけで、週に一回しか行きません。電車も使うので距離もあります。もし、また一人で探しに行くとすると、一週間後になってしまいます。それにもう、私には今月のお小遣いがないので本当に困ってるんです」

昨日は自分で搜索したらしいが、見つからなかったという。そんな綾に、非情にも夏美が追い打ちを掛ける。

「お金くらい友達に借りればいいのに。別に高いプレゼントじゃないんですよ？」

綾が寂しそうに答えていく。

「それはそうなんですけど、どうしてなくなったのか気になりますし。それに、できれば私は自分のお金で買ったプレゼントを、弟に渡したいんです」

どうせ自分で稼いだお金でもなかろうにと、夏美は内心、鼻であしらっていた。

「あんたまさか、お酒でも飲んでたんじゃない？」

「そ、そんなことはしてません！ 法律違反じゃないですか！」

嘲笑うような夏美の声に重なるようにして、綾がきっぱりと否定した。

「冗談なんだけど？」

「えっ、あつ、す、すいません……」

綾はすぐに謝った。

「わっかりました。やりましょう、ぬいぐるみ探し」

「えっ？」

そんな承諾に驚いて声を漏らしたのは依頼主の綾だ。

「大事なものは自分で手に入れる。弟さんを大切に思う白河さんの気持ちに感激しました。俺にもこんな優しいお姉さんがいたらなあ」と願うばかりです」

「は、はあ」

何気ない口説き文句のように小守はつらつらと喋る。

「弟さんの誕生日は？」

「五月二十七日です。テスト前になっちゃうんですが」

「なるほど。あと二週間もないってわけか」

画鋏で壁に吊るされているカレンダーを見ながら小守は思案顔になった。

「見つかるでしょうか……？」

綾は小守に問いかけたつもりだったが、なぜか夏美が偉そうに水を差してくる。

「そんなもの見つかるわけないでしょうに」そしてさらに連ねる。

「だいたいね、落とした記憶すらないっていうのはどういうことよ？ すっごく大事なプレゼントだったんじゃないの？ ねえ？」

綾は、立て続けに文句を言われて黙り込んでしまった。さらなる追撃を阻止すべく小守が片手をかざして夏美を制した。

「まあ、情報が少ないのでまだなんともね。とりあえず明日までにこれらを用意して下さい」

小守が滑らせた二枚目のルーズリーフの上には、箇条書きされた数個の項目が載っていた。

「明日までですか？」とルーズリーフを手にとって、綾が不安そうに言った。

「白河さんのためを思うと、習い事で忙しいのを差し引いてでも早く情報を持ってきてもらいたいので」

しばらくうーんと呻っていた綾がついに決心した。

「わかりました。明日の放課後に必ず渡しに来ます。それと……」まだなにかあるのかよと眉をひそめた夏美だったが、綾が鞆から

取り出した大きめの箱を見てすぐに目の色を変えてしまった。

「これ、よかつたら食べて下さい」

「うわああああ！ ナボーナだ！」

綾が取り出したのは、お菓子の六冠王で有名なナボーナだった。

しかも一番多く入っている三十二個入りのものだ。

「あの、相談受けるとき毎回言ってるんですけど、報酬みたいのはいいです。それにそれ結構高いんじゃない」

小守がまだ断っている最中に、夏美がナボーナの箱をぶんどってびりびりと包装紙を破り始めた。

「おい夏美！」

夏美の暴走をとめようと身を乗り出す小守だったが、あえなく包装紙だけを掴み取った。

「堅いこと言わないでくださいよ。うちの朝ごはんはチープなんですぐにお腹がすいてしまうんです。いただきます！」

夏美は箱を膝に乗せて一個目のナボーナを口に運んだ。うまみが口の中から溢れんばかりに滲み出て、顔をほころばせる。こうなったらもう、小守は貰うしかなかった。

「これ、家にあったお菓子です。勝手に持ってきてちゃったし、食べてもらえると嬉しいですよ」

証拠隠滅ということだろう。口をクリームで汚している夏美を見て、自然と笑顔になっていた綾が、小守の目の前にいた。

## 搜索と喧嘩

約束通りの日、約束通りの放課後に、綾は頼まれたものを持ってきて小守に手渡した。

「習い事スケジュール表、落とした可能性がある地点を記した紙。それから、落としたその日の、白河さんの足取りをペンでなぞった地図。これで完璧ですね。どうもありがとうございます」

いつもの、自分専用の椅子に座ったまま小守は会釈をした。

「あ、いいえ、私の方こそこんな依頼をしましてすいません」

小守の目の前に立ち、綾は深々と頭を下げた。その綾は今日もバイオリンの習い事で忙しいらしい。そそくさと部室から退散した。小守はふうとため息をついて受け取った情報を眺め始めた。

「昨日、ふと寝る前に考えたんですけどね、いまだクマのぬいぐるみをプレゼントにする人ってなかなかいないと思うんですよ。いくらお金が足りないからって、これはちょっと弟さんに同情しますね。私ならもつといいものをプレゼントしますよ。例えばこれみたくお菓子とか」

小守の目前には、昨日もらったナボーナをむしゃむしゃと食べる夏美の姿があった。テストが近いため、陸上部の活動が徐々に減っているらしく、今日はずつと小守と一緒にこの部室にいる。

夏美はまだナボーナが何十個も入っている大きな箱を抱きしめるようにして持ち、一心不乱に咀嚼していた。さすがの小守も我慢の限界を迎え、一バックだけ貰い受けて口に運んでみた。すると、濃厚でクリーミーななんともいえぬ美味しさが体中に広がった。

「って、こんなことしてる場合じゃない！」

お菓子の国にでも行ってしまったかのような浮遊感から脱却して、小守は半分になったナボーナをぱくりと一口で食べ切った。

「どうかしたんですか？ まだまだありますから先輩もどーぞ」

「いらん！ それより俺はそろそろ行くからな！」

手元にある数枚の資料を一つのファイルに入れた小守は、鞆を持って扉に向かって歩き出した。

「せ、先輩！？ どこ行くんですか私も行きます！」

慌てて箱を紙袋に放り込んだ夏美は、取りあえず自分の鞆だけ引っ張り上げ、口についたクリームを舌で舐めながら先輩の背中を追いかけて行った。

電車を利用して一時間強。綾が通うピアノ教室があるという『羨望駅』で二人が下車したとき、既に日は沈み街灯の明かりがありがたく感じられる薄暗い夜になっていた。都会ではあるはずだが比較的閑静な住宅街らしい。駅前にはレストランが点在し、夜道を歩く人々の食欲をそそっていた。「ちよっと夕食一緒に食べませんか」と、ブレザーの裾を引っ張り笑顔で誘ってきた夏美を横目に、小守は住宅街へと足を進めた。そしてずっと片手にしていたファイルから一枚の地図を取り出す。まずは始発点であるピアノ教室へと向かった。

「クマのぬいぐるみ屋さんから行かなくていいんですか？」

「あの店は白河さんいわく、ピアノ教室帰りの九時以降でも開いていた店だ。わざわざ急いで見つけに行く必要もないだろ」

そう述べた小守は、より一層足を速めてピアノ教室に向かった。

三十分後、二人は目的のピアノ教室を見つけたが、外から見る限り明かりも付いておらず営業していない様子だった。そのピアノ教室は平屋で、誰かが住んでいてもおかしくない風貌だった。教室の前の塀には、一枚のポスターが貼りつけてあり、『生徒大募集！』という文字が躍っている。曜日や時間帯に関係なく募集をかけているようだ。住宅街にひっそりと隠れたコアな教室だから、人数が不足しているのだろうか。残念ながら、そのポスターに連絡先までは明記されていなかった。

「せっかくここまで来たのに誰もいませんね」

「今日は元々やってないのかもしれないな」

小守は辺りを見渡した。人気のない道なので小声でもかなり響いて聞こえる。だいぶ住宅街の奥まで来ていたので街灯もまばらだった。

「あれっ？ でも、ここから探すのって意味ないんじゃないですか？ だってクマのぬいぐるみを買ったのは、ここから最後にたどり着くお店なんじゃ？」

「この地図をよく見てみる」

小守は一枚の地図を手渡した。そこには確かに、出発点のピアノ教室から赤線が引いてあったが、その赤線は、クマのぬいぐるみを買った店からもう一度このピアノ教室まで戻ってきている。

「わざわざ駅とは逆方面の店まで足を運んだみたいだな。店に着いて買った方がいいが、帰り道がわからなくなつて、今来た道を逆戻りしてここまできたつてことだろう」

夏美はきちんと理解してその続きを述べた。

「あ、それでこのピアノ教室から、駅方面に向かつたつてことですね？」

小守はうなずいた。夏美にしては幾分いい解釈をしてくれた。

「せっかくだから夏美、お前も手伝つてくれ」

「はいっ」

しばらくその言葉がこだましてどこかに消えていった。小守は自分の持つている紙と、夏美の紙を交換した。

「俺が地図を見て道を進んでいくから、夏美はその紙書かれたポイントを逐一確認してつてくれ」

夏美が持つているのは、綾が箇条書きで記した、落とした可能性があるポイントだった。もちろん、綾は落とした記憶がないと言っているの、毎週のようにピアノ教室に通い詰める中で思いつく、気になる箇所を出来る限り書いてもらっただけのことだ。

「じゃ、行くぞ」

かつかつと革靴を響かせながら歩き出した小守を、ふと、夏美が呼びとめた。



「あの先輩、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだよ？」

小守が歩みをとめる。

「こんなことして、本当にぬいぐるみなんか見つかるんですか？」

私にはどうも無意味なことにはしか思えません。失くして一週間してやっと相談に来て、しかも失くしたときの記憶がないなんて絶対おかしいです。もしかして私たち、白河綾に誑かされてるんじゃないですか？」

夏美は紙を握りしめてそう訴えた。

「面倒くさいならはつきりとそう言えよ」

「そうじゃありません」

「それと、お前が『誑かす』って単語を知ってるなんて、驚いた」  
あからさまに話をそらす小守。

「なんでこんな相談受け持ったんですか？　なんか、先輩らしくないです」

「別に、お前に勉強教えるよりも楽し」

「ちゃんと答えてください！　私は真面目に聞いてるんです！」

その詰問口調にようやく振り返った小守は、衝撃の告白をした。

「じゃあ真面目に答えるぞ。あの人はな、俺のタイプだ」

「え……」

夏美は言葉を失った。たった今、目の前にいるこの先輩を好いて  
いるのだから当然だ。

「昨日言っただろ？　白河さんみたいなお姉さんがいたらなあって。

あれは俺の本心だ。望めるのならなんとかこの件を利用して、恋仲  
になれないか模索中だ」

「そ、そんなっ……！」

夏美の手から、はらりと紙が滑り落ちた。

「お前、成績悪い上に鈍感なんだな。言わなくても分かるように振  
る舞ってたのに、気づかなかったのか？」

もう言葉が出なくて放心状態の夏美に、小守がとどめを刺した。

「言い忘れたけどな、白河綾ってのは白坂高校三年で学年二位の生徒、つまり、俺に次いで頭のいいやつだ。俺はそういうのが好みなんだよ。夏美、お前じゃなくてな」

夏美は先輩に背中を見せてとぼとぼと歩きだした。

「おい、どこ行くんだ？」

「……かえる」

か細い言葉が小守の耳に届いていた。だんだん小さくなっていく後ろ姿を黙ってしばらく見つめたあと、落とされた紙を拾い上げた小守は一人で搜索を開始した。

## 先輩と私

翌日の昼休み。

授業中はいつも居眠りをしているはずの夏美が起きてる。それだけで二年C組はどよめいていた。廊下側の一番前に席を構える夏美が、わざわざ片肘をつき、遠くにある窓の外に目を向けて呆けていたのだから、クラス内で気づかぬ人間などいなかった。それも一時間目から四時間目までずっとだ。授業をしにきた何人もの先生が体調不良を危惧したものの、夏美は誰の呼びかけにまったく反応しない。話しかけてもしらを切りとおしているのか、あるいは視界に入らないのか。定かではないが、昼休みになるまでずっと淀んだ瞳で窓の外を見つめ続けていた。

「なつつみ！ お昼だよお昼！」

人が少なくなったクラスで軽々と話しかけたのは、友達の風見ゆいからだ。サクランボ形の髪留めを二つ使って小さなツインテールを作っている小柄な少女だ。

ゆいかは一年のときから夏美と同じクラスで親交が深い。友達だからこそ朝から不安で不安で仕方なかつたが、なぜか躊躇ってしまいが話しかけることができず、今になってようやく、明るい声での接触を試みている。

「夏美のお昼ごはんはなにかな？ 教えてくれないなら漁っちゃうぞ！ あつ、今日はお弁当？ それとも私と一緒に購買？ それとも？」

化石のようになっていた夏美をなんとかしてやろうと、ゆいかは机の横にかかっている鞆のチャックを開いた。それでもビクともしないようなので今度はしゃがみ込んで少し中をのぞき、続けざまに手探りに移行する。そしてようやく、お昼ごはんらしきものを掴み取った。

「あ、今日はお弁当だったか、お母さんの愛を感じるね！」

夏美が無反応なので、ゆいかはついにそのお弁当を引っ張りだした。

「きつとおいしそうなおべんと……ってあれ？」

ゆいかが手に持っていたのはインスタントのカップラーメンだった。しかもその上部には二十パーセント引きの特別なシールが付いている。さらにその上にはポストイットが張られており、「食堂がどこかでお湯貰って！」という親からのメッセージが躍っていた。

「あつ、今日は随分と……お手頃なお弁当なんだね……？」

苦笑したゆいかはカップラーメンをそつと鞆に戻し、夏美の横顔を見つめた。よく見るとその瞳は少し光って見えた。涙だろうか。

少し考え込んだゆいかは唐突に、廊下を指さして叫んだ。

「あつ！ 小守先輩こんにちは！」

「えっ！」

夏美は声を漏らしてせわしなく体を動かした。ゆいかの指さす廊下に目を向けるがそこには誰もいなかった。

「嘘ついてごめんなさい。でもやっぱり、小守先輩のこと？」

全身で落胆を表現するような夏美に、ゆいかは優しく声を掛けた。

「なにかあったの？ 気分が悪いとお昼ごはんがおいしくないよ？」

「食べないから、別にいい」

しれつとした態度だが、やはり夏美は落ち込んでいるようだ。

「カップラーメンのお湯貰ってきてあげるからさ。それにパンもおごつてあげるから一緒に昼食べよ？ 今日は天気がいいから屋上にでも行こうよ？ ね？」

ゆいかは子供をあやすような声を出した。

「お腹すいてるでしょ？」

「別に」

そのとき、夏美のお腹がぐぎゅると呻いた。

「べ、別に……」

「じゃ、先に屋上行って。ラーメンのお湯とパン買ってくるから！」

「えっ、ちよつとゆいか！」

少し手を伸ばしてとめようとした夏美だったが、ゆいかは間髪をいれずにカップラーメンを盗み出し廊下を駆けて行った。一人取り残されたような名残り惜しさを感じ、迷っていた様子の夏美は思い切って席を立った。

昼休みに屋上を利用する生徒はそう多くはないがゼロというわけでもない。かつかつと規則的なリズムで階段を上り、扉を開いた夏美は屋上を見渡した。いるのは十人やそこくらいだ。あまり大騒ぎしている生徒がいないことを幸運に思い、できるだけ人から離れたベンチに腰をおろした。

するとまたお腹が鳴った。今日はこいつのせいでこんなことになったんだと彼女は一人で憤慨する。もう少しで心のもやもやを解決する手立てが見つかるはずだったのにと、なんとなく感じていた。

なんとなく。本当になんとなく

お腹を押さえてふと目線を上げると、十メートル以上離れたはす向かいのベンチに見覚えのある人物を捉えた。

（せ、せんぱい！？）

カップルらしき生徒が座っているベンチが両側にあるのに、平然とした顔で読書に耽りおにぎりを頬張っている小守先輩の姿があった。先輩がこんなところでお昼を食べていたなんて知らなかった。全然知らなかった。聞いたこともなかった。

（結局私は、先輩のことなんてなんにも知らない　　）

するとまたお腹が鳴って空腹を夏美に知らせた。よく思い返してみれば、昨日の夜からろくに食べ物をお口にしていない。どんなものも喉を通らず、水すら飲む気がしなかった。そんな今でも、空腹なんか相手にしてもらえないと夏美は無視しようとする。でもまた鳴った。止まる気配がない。食べ物を欲するお腹はそれから何度も何度も蠢いて、食べ物を乞うた。

「ああああもう、うるさいうるさい！　今考えてんだから黙ってて

よ！」

ついには声を張り上げて立ち上がってしまった。何かと周囲が沈黙して夏美に視線を注いでいる。その中の一人に、学年一位の小守先輩も含まれていた。

（やばっ！）

即座にベンチに座り込んで俯くと、何事もなかったかのように屋上の生徒たちは会話を続行した。

（なにやってるのよ私っ！）

声にできない心の声を噛みしめて、夏美はおそろおそろはす向かいに目をやった。

すると小守先輩はもう読書に戻っていた。気づいていないわけがないのにどうして声をかけてくれないのと思うと、やっぱり心細かった。

ふいに夏美は、胸ポケットから生徒手帳を取り出した。

（恋は先手必勝、愛が欲しけりや掴み取れ　　）

生徒手帳の最終ページには、自分で書き留めた格言があった。あれだけの不安要素を好きな本人から言われても諦めきれない。だって好きなんだから。

（だめだだめだだめだ！　こんなんじやお嫁に行けない！）

弾かれたように夏美は生徒手帳に付属されている小さなボールペンを握りしめ、さらに続きを書き加えた。

（　　好きは嫌いの裏返し、嫌い好きの裏返し　　）

一筆書きのような乱雑な字だったが、その文章を記したことになにかが夏美の中に芽生えた。なにかは自分でもよく分からなかったが、確かに芽生えた。

もうお腹は鳴らなかった。夏美は先輩の元へと歩み寄った。

「せ、せんぱいっ！」

震える唇を見られまいと手で軽く押さえながら続ける。

「先輩にいくら嫌われようとも私は大好きです！　ごめんなさい仕方ないんです！　今日の放課後、また部室に行かせて下さいお願い

します！」

両側にカップルがいるというのに夏美はそんなセリフを吐いた。また騒然とした周囲からは小さなざわめきとともに、後押しするような口笛が響いた。

「お願いします！」

火照っている頬をどうすることもできず、とにかく深く深く頭を下げることを考えた。するとそれを応援する生徒たちが拍手を始め、声援を投げてきた。

「誰か知らんけど頑張れえ！」

「ほら、さつさと答えてやれよ！」

いつの間にか告白を支持する人たちで溢れていた。それでも目をつぶったままで顔をスカートに向けている夏美はじっとその返答を待った。

そして、声援がやんだ。

春風が頬を撫でた瞬間に先輩の声が届いた。

「なに言ってたんだ。今日はお前にやってもらいたいがあるから必ず来い。必ずだぞ？」

何食わぬ顔で言い切り、先輩は読書に戻っていった。

勝利を確信したまわりの生徒たちが更なる拍手を夏美に送った。

お祭り騒ぎの中、嬉し恥ずかしそうに微笑んだ夏美がその中心にいた。

「なつつみー、ラーメンのお湯入れてきつ……」

片腕で上手く扉を開けたゆいかは屋上の状況に絶句した。さつきまで瀕死状態だった夏美がすごい笑顔でまわりの生徒たちと握手していたのだ。有名人にでもなったのかと思いきや、一人動かざるが山の如しと言った感じの小守先輩を見つけ、大まかな展開を掴んだ。ゆいかは屋上には入らず、静かに扉を閉め、心底嬉しそうな顔でその扉にもたれかかった。

## 氷川夏美の包囲網！ その1

「せんばーい！ 私にご用ってなんですか！？」

部室の扉を弾き開けるや否や夏美は爆音をとどろかせた。その姿を直視して、今日の放課後も騒々しくなりそうだと小守はため息をついた。

「取りあえず、椅子持ってこっち来い」

「はい！」

気分の落差が甚だしい。さっきまで悩み耽っていた奴だと誰が思うだろうか。パイプ椅子を先輩の前まで持ってきた夏美は、大きな机の上にばら撒かれた紙類を見て驚いた。

「うわ。綾とかいう女からもらった資料って、こんなにいっぱいありましたっけ？」

「俺が昨日のうちにメモしたのもある」

小守が机の上を整理する。その中の数枚を夏美に手渡した。

「えっと、これは？」

「お前のために資料をまとめとておいた。これからお前には毎日、このコースを歩いて調べ物をしてもらう」

夏美の顔色が曇る。

「毎日ってあの、学校とかあるんですけど」

「平日は放課後。休日は昼間にやってくれ。もちろん、学校がある日は毎回ここで成果を報告してもらうぞ」

「あの、変則的にも部活があるんで毎日となるとちょっと……」

役目から逃れようと言葉を濁す夏美だったが、小守にはある秘策があった。

「最近、あれを勝手に、俺の許可もなく食いまくってる奴は誰だ？」

小守は部室の端っこを指さした。そこには大きな紙袋に入ったナボーナの箱が鎮座していた。夏美はナボーナを家に持って帰って家族に盗み食いされるのを恐れたため、この部室に置きっぱなしにし



ていたのだ。

「あ、あれ？ 誰だっけ？ 思い出せません」

「その口がなにを言う」

迷いに迷った夏美はほんと手をたたいた。

「ゆいかですよ！ ゆいかが食べました！ くっそおおゆいかのヤツっ！ 直ちに連行して参ります！」

「誰？」

小守の疑問を解かずに立ち上がった夏美は、逃亡するように駆け出した。扉を開くため手を伸ばしたそのとき、勝手に扉が開いたので夏美は顔面を強打した。

「ぶっ！」

尻もちをついた夏美の前にいたのは、扉を開けたと思われる白河綾だった。

「あつ、すいません！ 大丈夫ですか？」

介抱しようと綾は膝をついたが夏美は一人で立ち上がる。

「なっ、なににきたのよ？ ここに用があるときは私を通してよっ！」

どうしても綾の存在が気に入らないので夏美はすぐに文句を垂れる。

「ごめんなさい。今度からそう」

「しなくていいから。すいません、夏美のいうことはあまり鵜呑みにしないで下さい」

視線を右往左往させて謝る綾の言葉を譲り受けて、小守がそう続けた。それから、「どうかしたんですか？」と後輩の怪我を労わりもせずに、そつと綾に尋ねた。

「あ、えと……見つかったかなと思って」

綾は床に目を向けたまま小さな声で呟いた。

「んな早く見つかるわけじゃないでしょうが！」と若干一日しか耐えていない綾に対して、夏美が怒りの矛先を振りかざしていた。今にも襲い掛かりそうな野生の覇気を全身から放っている。

「で、ですよ？ すいませんまた来ます！」

結局、綾は一切落ち着きを見せずに部屋から走り去って行った。それから五分ほどしてようやく正気を取り戻した夏美に、小守が再度命令した。

「食べたナボーナの分だけ働けよ。お前は文句を言える立場にないんだから」

「はい」

でも夏美は気分を悪くして口数がほとんどない。空返事しか返って来なそうだ。

「でもあの、教えて下さいよ。昨日どんなことを調べたのか」

「その紙見ればわかるだろ。ついでに現国の勉強にもなるかもな」

「ちゃんとやるんでお願いです。昨日あったことを先輩の口から聞きたいんです」

そう懇願された小守は少し悩んだ末、前日のことを語り始めた。

とつくに日が落ちていた。小守先輩からだいたいの内容を聞き、なおかつ、今日なにをすればいいのかを指示された夏美は、一人で『羨望駅』に到着した。駅から吐き出される憂鬱そうなサラリーマンたちと一緒に住宅街へ向かう。二、三十分ほどかけてピアノ教室までやってきた彼女は、その教室の状態を見て呆れかえった。

（今日もやってない……）

門から身乗り入れて教室の庭を確認してみるものの、人っ子一人見られず、耳を澄ましても人の気配を感じない。もし誰かがいたらクマのぬいぐるみについて聞いてこいと、先輩から頼まれていた彼女は、取りあえずピアノ教室を起点とした経路を地図の通りに進んでみることにした。

しばらく進んでいくと自動販売機があった。ここの周辺を確認せよと紙に書いてあったので夏美は探してみた。自動販売機の上、下、汚そうで気の進まない裏の部分、隣に置いてあるカンビンのごみ箱の中。どこを探しても見つからない。ただ単純に手足がべたべたす

るばかりで少し気持ち悪くなった。ねえちょっと先輩、いくらなんでもこんなところにあるわけじゃないじゃない。それに綾とかいう女はいつたいなにを考えているのよ。本当に鬱陶しい奴。

薄汚れた手をハンカチで拭いた。少しやる気をなくしていた夏美は、さっきの先輩の言葉を思い出した。

昨日、クマのぬいぐるみ売っている店のおじいさんに聞いたんだが、白河さんはどうやら、おじいさんが用意した紙袋にぬいぐるみを入れて帰ったらしい。つまりだ、いいか夏美？ 探すのはクマのぬいぐるみじゃない。クマのぬいぐるみが入った紙袋を探すんだ。

当然と言ってしまえばそれまでだが、確かに夏美は勘違いしていた。ぬいぐるみをわざわざ小脇に抱えて帰る女子高生など見たことがない。そんな恥ずかしいことをするのは、外を縦横無尽に走り回っている空元気な小学生くらいだろう。

一枚の地図と、一枚の搜索ポイントについて書かれた紙を持って夏美はひた進む。すると前方から、着物を着て杖をついているおばあちゃんが歩いてきた。なんとも優しそうな顔をした小人みたいなご老人だ。その人とちようどすれ違おうとしたとき、触れてもいないのにおばあちゃんは倒れた。

「あつ、大丈夫ですか？」

夏美は反射的に、転倒したおばあちゃんの安否を問うた。

「おやおや、すいませんねえ」

よく転ぶらしく、おばあちゃんは他人事のようにそう言って自力で立ち上がった。よいしょ、という掛け声を漏らしてから、夏美に会釈をしてまた杖をつき、おぼつかない足取りで歩き始めた。

この人、本当に大丈夫だろうかと憂いた矢先、また先輩の言葉が脳裏をよぎった。

近くの交番には俺がもう行ったがな、ぬいぐるみの類いは届いてないそうだ。それに、同じような用件でやってきた女の子がいたよってその警官笑ってたから、恐らく白河綾が一度尋ねたんだろう

な。念のため駅員の人にも聞いてみたがなかった。白河さんは最寄駅から徒歩五分たらずの場所に住んでいるらしいから、そこは探さなくても大丈夫だろう。大事なぬいぐるみを失くしたんだし、一旦駅まで戻ったはずだからな。そこでなくなったとは考えにくい。つまり見つかる可能性があるとするればだ、ピアノ教室から『羨望駅』のルートしか考えられないんだ。周辺搜索をしたいのは山々だが一軒一軒訪ねるのは怪しまれる。だからさりげなく、道行く人たちに声をかけて聞いてみてくれ

夏美は、おばあちゃんの後ろから声をかけた。

「あのっ」

そのおばあちゃんは一旦停止してから、ゆっくりと振り返った。

「おや、なんでしょう？」

「最近、ここらへんで紙袋を見かけませんでしたか？ クマのぬいぐるみが入ったやつです。とっても大事なもので、ちよつと探しまわってるんですけど」

きつと、街ゆくサラリーマンよりも毎日この周辺でたむろっているおばあちゃんのほうが精通しているだろう。そう思った夏美は思い切って訊いてみた。

「ああ、はいはい、聞きましたよ」

それは夏美にとって予想外の返事だった。

えっ？ 聞いた？ どういうこと？

「えつと、見たんですか？」

おばあちゃんは足踏みするように小刻みに向きを整えながら言った。「いやいや、聞いたんですよ」

情報を持っていそうだけど少し返答がおかしい。もしかしてこのおばあちゃん、ちよつとボケが入ってる？

「あの、おばあちゃん、見たんですよね？」

「いえいえ、聞いたんですよ」

なんだか腹が立ってきたので夏美は声量を上げてみた。

「聞いたんじゃないくて、見たんじゃないんですかあ！？」

「いやいや、聞いたんですよ」

耳が遠いせいか、おばあちゃんは大声をものともしない。夏美はもう諦めて道なりに歩き出した。話をするだけ無駄だと思った。

「昨日でしたかねえ。制服を着た妙な男の子から聞きましたよ」

夏美はとつさに進路変更しておばあちゃんに駆け寄った。おばあちゃんが言っていたのは昨日の出来事だったのか。おそらくは昨日、先輩とこのおばあちゃんはすれ違ったんだ。そのときにぬいぐるみのことを知ったんだろう。

「その男の子、なんて言っていましたか？」

「なんだったかねえ、最近は何物覚えがわるうてわるうて、同じコースしか歩けなくなってしまうて、歳をとるといいことがないねえ、ああ、お嬢ちゃんにはまだわからないかねえ」

そんな愚痴を聞きたいんじゃない。

「あの、おばあちゃんはクマのぬいぐるみのこと、なにか知ってるんですか？」

「わたしが知ってるのはねえ、クマのぬいぐるみが、この先の小さなお店で売ってるってだけのことかねえ。名前もない店だから、めずらしいと思つとつたのよ。学生さんがわざわざあんな老舗でものを買ったなんてねえ」

おばあちゃんは夏美が進もうとしていた道の先を指さした。その指先が示していた先を地図で確認すると、ちょうど綾がぬいぐるみを買ったと主張していた場所と合致する。

「おばあちゃんは、どうしてそんなお店を知ってるんですか？」

「友達なんよ。その店のおじいさんと。さっきもちよつと喋ってたばかりでねえ」

なるほど。老い先短い人生を共有しようとしているのか。

それにしてもいきなり当たりくじを引いた気分だった夏美は、さらに質問した。

「最近、そのおじいさんのお店に女の子は来ましたか？」

「んん？　なんか言つとつたきがするねえ。ちようどお嬢さんくら

いの子が来たって」

間違いない。白河綾だ。怪しいとは思っていたけど、どうやらクマのぬいぐるみを買ったことだけは確かなようだ。

「久しぶりの来客だって喜んでたねえ。これ全部、昨日の男の子にも伝えたことなんよ」

えっ、と思つて夏美は紙を見た。斜め読みしていくと、確かにそんなことが記述されている部分があった。そういえば、先輩はかいつまんで話していた気がするし、やっぱり余計な部分は省いていたのかな。

「では、わたしはこれで」

そのおばあちゃんは夏美に軽く会釈して、アリが歩くくらいの速度で遠ざかつて行った。

## 氷川夏美の包囲網！ その2

「えっと、次は CD ショップに行けと！？」

記載されている文字を見て夏美は仰天した。どうやら綾は、ふらふらとこの夜道をを彷徨いながらCDショップに寄っていたらしい。弟の大事なプレゼントを買うためとかなんとか言っていたくせに、自分の趣味を優先している気がぶんぶんした。

そのCDショップはまだ営業していた。最近はどうな店でも二十四時間営業しているから別に珍しいことではない。でも駅からだいぶ離れた場所にあるし、大通りに面してはいるが人が少ないからか、夜の十時で営業は終了するようだ。敷地面積も、とても都会のものとは思えない小さな規模だった。

眩しさに目を細めながら夏美は入店した。いらつしやいませ、と低い声の店員さんの声が聞こえてきたが、有線放送から流れているラップ調の音楽にかき消されてしまった。

あの女はここでなにをしたのだろう。そう思って先輩が書いた紙を読み進めていくと、その答えが見えてきた。

『奥の方にある邦楽の棚から、弟が欲しがっていた『ウルス』というバンド名のベストアルバムを手についた』

先輩の筆跡をなぞるように読み終えてから、夏美は店の奥の方へ進んでいった。

目が眩むほど明るい店内には数人しかいなかった。夏美はがらがらの店内をすすると進んでいく。ものの数秒で、一番奥にある邦楽の棚にたどり着いた。頭文字が『う』と書かれた欄を見つけ出し、その中からウルスというバンド名を捜し当てた。

夏美も音楽はよく聞かし、ウルスというバンド名にも聞き覚えがあった。確か、三人組のビジュアル系バンドだった気がする。既に十枚以上もシングルを出し、アルバムだって数枚、この世に送り出している。見た目だけのビジュアル系バンドだと初めは避けていた

時期もあつたが、友達の風見ゆいかの勧めで実際に聞いてみると、躍動感を体現したような、実際に演奏している模様が目に浮かぶような熱い曲目に惹かれてしまい、CDも数枚買ってしまった。普段はあまり持ち歩くことはないけどプレーヤーにだって数曲移してある。夏美は久々な感覚を思い出しながら、ウルスの欄から一番太いCDを手にとった。

ウルス・ザ・ベスト、とわかりやすく銘打っているベストアルバムだった。そのジャケットの中央には、左手でカッコよくスタンドマイクを持った、金髪で長髪のまさにビジュアル系と思しきボーカルの姿があつた。ボーカルの人だけは名前を聞いたことがある。えつと確か……いや、なんだっけ、忘れた。まあいいか。その両隣りでは、ちよつと遠目に撮影された二人の仲間たちがギターを肩から掛けてかつこよく決め込んでいた。

「もしかしてあの女、これ買った？」

夏美は、さっきの文章の続きを読み始めた。そこには「買った」ではなく、「手にとつてしばらく眺めていた」と表現されていた。買おうにもお金がなくて、その場でずつと立ちすくんでいたということだろう。たった三千五百円の貯金すらないのか。でもなんともまあ、子供っぽい行動をとる女だな。

しかし夏美もそこで五分ほど停止していた。それから勝手に決断する。

（よし、これ買おう！）

あの女、私が買ったこと知ったら悔しがるだろうな

夏美はウルス・ザ・ベストを片手に、足早にレジへと向かった。

さっきおばあさんが言っていた、名前のない店までは意外と遠かった。地図の赤線はくねくねと蛇行していて、最短距離で目的地の店まで行けないのだ。その間、いくつかのゴミ収集場所を覗いてみたり、誰もいない小さな公園内を探してみたり、コンビニで綾が買ったらしいお菓子を買ってみたり　と、普段はしない行動をして



きて精神的に参っていた。陸上部なので体力には自信があったが、面白くないことばかりしているのでそんなことは関係なく疲れてしまった。CDショップとコンビニでは既に昨日、小守先輩が聞き込みしてくれたらしい。どちらの店員さんも落し物は特にないと言っていたようだ。ならば自分って無駄足なんじゃないかと思ったが、同時に、余計な手間が省けてよかった氣もした。

そしてついに、夏美は名前のない店の前に到着した。時刻はちょうど七時。

その外観は店と言うよりも、普通の一軒家と等しく感じられた。敷地は小さく、高さで稼いでいるような建物。店の名前が書かれていたと思われるプレートが掲げてあるが、ペンキがはげてしまつてまったく見えない。この店はだいぶ古い建物らしく、薄っぺらい木の板でできているようだったので、今にも崩れそうに見えた。

一階と二階、どちらの電気もついていた。中に人はいるようだ。扉はガラス戸だった。ここが本当に店なのかどうか怪しい氣もする。しかし、地図と照らし合わせてみてもここしかありえないので、夏美は息をのんでから扉を開いた。

「こ、こんばんは」

蚊の鳴くような声で挨拶をした彼女は、店内を見渡した。

店内の両壁には、天井まで続く棚が設置されていて、その全ての場所にクマをテーマにしたものがディスプレイされていた。キーホルダーのように小さなものから、抱き枕になりそうな大きなもので沢山あった。いくつか骨董品がまざっているところが、おじいさんらしい趣味だと思えた。

ただ、どの商品にも値札のようなものは付属されておらず、趣味の範疇にも思えた。しかしここまでクマを愛している店はそうそうないし、ここが目的の店で間違いなさそうだ。あの女が買ったぬいぐるみはどれだろうと、夏美がぬいぐるみが置かれている棚を眺めていると、お店の奥から声が飛んできた。

「マリおばさん？　なんだい忘れものかい？」

店の奥には部屋があるらしいが、床まで届きそうな長い暖簾で見えないようにしてあった。その暖簾をくぐるようにして顔を出してきたのは、もう既に髪の毛がほとんどない、丸坊主のおじいさんだった。

「突然すいません、クマのぬいぐるみの噂を聞きました」

夏美はお爺さんに向き直って頭を下げた。するとおじいさんはサングダルを履きながら、「そうでしたか。またここも繁盛の兆しかね」と言ってぎこちなく笑った。

「あの、もしかして、最近女の子が来たんですか？」

「来ましたよ。なにやらおどとした感じの子だったね。その子から聞いたのかい？」

まあちよつと違うけど、間違いではないので夏美は一応うなずいておいた。

「どれを買っていったんですか？」

「これこれ、この店で一番人気のぬいぐるみね」

おじいさんは意外にしっかりと足取りで近づいてきて、夏美のそばにあった棚から一つを取った。それは高さ五十センチほどのぬいぐるみだった。癒しグッズとしてベッドの隣に置いてても、邪魔にならないくらいの大きさだ。ちなみに値段は千円ぽつきり。

「これを買いにきたのかい？」

「えっと、そうじゃなくて」

夏美はここぞなにをすればいいか忘れていた。先輩が渡してくれた紙を見たが、どこまで読んだのかすら忘れていたので急いで探した。

その店のおじいさんと、仲良くなれ  
えっ？ どうしてそんなことを？

「どうかしたのかい？」とおじいさんが紙を覗き込んでくるので、夏美はとっさに背中隠した。

「いえなんでも、あははは」

ゆがんだ顔で笑う彼女は、その隙にどうしようか悩んだ。

（な、仲良くなってどうするのよ先輩！　そこから先を知りたいのにつ！）

つられたようにして笑うおじいさんが一つ提案した。

「なんでもいいさ。こんな店に来てくれただけでもわしは嬉しいね。もしよかったら、一緒に夕食でもどう？」

おじいさんは、手のひらで店の奥を指さした。そこは和室らしいが、さつき暖簾の隙間から見た限りでは、かなり汚れている様子だった。そもそも初対面の人間をいきなり夕食に誘う神経におののいた夏美は、「ま、また来ます！」と声を残して店を飛び出した。

呆氣にとられていたおじいさんはむなしそうに呟いた。

「いきなりはまずかったか。そういえば、昨日の男の子にも、断られたのう」

## 結果報告

次の日の放課後になった。夏美がいつものように部室の扉をぶちあけると、先輩もいつものように勉強に熱中していた。

「おう」とどうでもよさそうに返事する先輩に、夏美が糾弾する。

「先輩！ 昨日のやつどういことですか！」

「どうって？」

「おじいさんと仲良くなれって書いてありましたけど、これの意味ですよっ！」

夏美は紙を取り出してその箇所を何度もたたいた。

「昨日、私にそんなこと言ってませんでしたよね？」

「言ったぞ。お前、俺が話してる途中で何回か寝てただろ？」

小守はすべての要求を夏美に話していたが、夏美はその途中でうつらうつらしていたので先輩の話を不完全に聞いたまま、探しに行っていたのだ。

「で、どうだった？ なんか収穫はあったか？」

自分にかんりの非があると感じた夏美は、仕方なく先輩の向かいに席を作り、昨日あったすべてのことを先輩に伝えた。ピアノ教室はやっていなかったこと、途中でおばあちゃんと会話したこと、CDを買ってみたこと、クマのぬいぐるみ屋さんにいたおじいさんとはあまり仲良くなれなかったことも話しておいた。

「あのおじいさん、繁盛の兆しがなんとかって言ってました」

「そのおじいさんと仲良くなることが一番重要なんだけどな」

小守はそう呟いてノートにペンを走らせていた。現国を解いているようだ。

「それで、どうしておじいさんと仲良くなる必要があるんですか？」

あの女の依頼とどんな関係が？」

「あの人はおそらく重要人物だ。つながりを持っていて不便になることはない」

教科書のページをめくった小守は問題文を黙読し、ペンを回している。

「どうしてですか？」

「お前はあまり気にしないで今日も同じコースを歩いてくれればいい。説明が億劫だ。それに俺だって、まだ確信があるわけじゃないんだよ。ただ一つだけ言えるのはな、夏美。お前の考えはあながち間違っちゃいないってことだ」

夏美はかなり驚いた顔をして問い返した。

「どういうことですか？」

「あの人はな、白坂綾は、なにかを隠してる。クマのぬいぐるみ探し以外のなにかを」

「えっ」

夏美は、その発言に声を詰まらせた。

「おそらく、クマのぬいぐるみはどこを探しても出てこない。あれは白河綾の狂言だ。だとしたら彼女の目的はほかにある。ならなにが目的か。その目的はきつと、彼女が最初に俺に渡してきた資料の中にあるはずだ。でもどんな目的でどんなものを求めているのか見当がつかない。だから今は様子見として、ちゃんと調べているという事実を作っておきたいんだ。おじいさんと仲良くなることも、その一環だ」

先輩の言葉を頭の中で処理するのに時間をかけていた夏美が、またまた質問する。

「うーんと、言いたいことはなんとなくわかりましたけど、どうしてあの女がクマのぬいぐるみを落としてないってわかったんですか？」

すると小守がすらすらと説明した。

「白河綾が地図で記したルートどこにもクマのぬいぐるみは見当たらない。交番にも駅にも届いていない。それに、どうして落としたときの記憶がないのか。これはお前も気にしていたことだろ？全部を総合すると、落としていないとしか思えないんだよ」

言いながら現国の問題文を読み終えた小守は、その解答に取り掛かった。

「ああ、一番わかりやすい答えを言うとな、弟の誕生日を祝うためのプレゼントを、わざわざその三週間も前の、しかもピアノ教室の帰りに慌てて買いに行く必要はないはずだろ。それよりも、休日にならぶらして選びに行けばいいだけの話だと思わないか？　いくら白河さんが多忙の身だからって、休日まるまる潰すような習い事をしてるわけじゃないからな」

白河綾から受け取った資料に目を通してしている小守は、最低限の事情を知っていたのだ。

「でも、なん」と質問しかけた夏美を手のひらで制して、白坂高校全体としても、最も頭のいい男子生徒は答えた。

「どうしてわざわざ、白河さんが目的を隠してまで依頼してきたのかは俺にもよくわからない。だからそれがわかるまでは、頼むから黙って搜索をしてくれないか？」

小守はふいに顔を上げた。その顔は晴れ晴れとしていた。

「頼むよ」

夏美の耳に届いたのは、先輩が自分を、優しく抱きしめながらそっと囁いてくれたような、言い換えるなら、雲のようにふわふわな感じの、素敵な一言だった。

「やります！　私、先輩のためにやります！」

ガッツポーズを決め込んで夏美は部室を飛び出した。うおおおという叫び声が廊下に響き渡っている。それはそれでいいのだが、できれば扉を閉めていってくれと願う小守は、その扉を閉めるために静かに重い腰を上げた。

### 氷川夏美の包囲網！ その3

夏美はもしや、幽霊部員にでもなってしまったのか。陸上部ではそんな噂が流れ始めた。

夏美にメールしてみてもまったく反応がないので最初の内はみんな気にしていたが、走ることだけが目的の陸上部では、普段から走りまわっている彼女を心配する者はいなかった。毎日毎日、学校の行き帰りに目的もなく疾駆している彼女に遭遇していて、元気なことは陸上部のみんなが知っていた。いつも通り元気な夏美は、電車の中でも駆けずりまわるほどの勢いで、今日も『羨望駅』にやってきていた。

搜索は、先輩が一人で行った一回も含めるとすると、五日目になっていた。日曜日だったが、ピアノ教室は相変わらず営業していない。しょうがないのでいつものようにコースを辿り、なにかこの不可解な依頼の解決の糸口がないか探し始めた。

今日は雲行きが怪しい。雨が降りそうで降らない不安定な天候だった。それでも夏美は先輩の要求を受けて、こうして休日の昼間を使って『羨望駅』にやってきていた。

もう道順は覚えてしまった。ついでに特になんの変化もないのでつまらなかった。人通りも相変わらず少なく、たまに道幅ぎりぎりのワゴン車が通り過ぎるくらいだ。

そして最後にやってきたのは、クマのぬいぐるみが置かれている名前のないお店だった。そのお店を見上げてみると、なんだか悪魔にでも取りつかれているような印象を受けた。それでも夏美は躊躇せずにはガラス戸をスライドさせた。

「こんにちはー」

入店すると同時に、中にいた人が夏美に顔を向けた。

「あ、いらっしやい」

そこにいたのはいつものおじいさんではなかった。すらりとした

長身で、すべての髪を二センチくらいに切りそろえた清涼感のある男性だった。歳は、二十代後半といったところだろうか。休日だからラフな服装で、黒縁の眼鏡をかけている。かなり高学歴で聡明な人間にも見えた。

その人はまるでこの店の店員のように挨拶をしたので、夏美は訊いた。

「あの、ここのお店の人ですか？」

昨日までは、ここにおじいさんしかいなかった。こんな人にあつた覚えはない。

「あ、すいませんねお譲さん」と口を挟んできたのは奥の部屋から顔を出したいつものおじいさんだった。優しそうな顔で夏美を迎え入れようとしていた。

「そいつはわしの孫だね。ろくでもない仕事ばかりしてウチの厄介者だよ」

「そんな言い方しないでくれよ。僕だって頑張ってたんだから」  
店の奥を振りむいて孫らしい男は反論した。それからまた夏美を見て、少し頭を下げながら弁解を述べる。

「ごめんなさいね。僕は高梨って言います。ちよつとおじいちゃんに顔見せに來ただけなんです。それにしても、学生さんがこんな古びたお店に來るなんて、珍しいね」

ここに來る人間は昔から年老いた人ばかりなのだろう。夏美はここに來るたびにそんなことを考えるようになっていた。

「いえ、ちよつといろいろあります」夏美は理由をぼかしてから続けた。「今日はお昼ごはんをごちそうになります」

すると、高梨は怪訝そうな顔をして、暖簾の前にいるおじいさんに向かって叫んだ。

「なにやっつてんだよじいちゃん。こんな若い子連れ込んで」

高梨がいきなり態度を翻す。

慌てて夏美が誤解を解いた。

「あ、違うんです。私がお願いしたことなんです」



夏美はこの数日で、おじいさんとの仲を深める作戦を実行に移した。おじいさんの扱いくらいなんてことない。息子や孫の話

いや、孫のことは話したがらなかったが、それに戦時中の話を聞かせて下さいと頼んでみればほらこの通り。すぐに一緒にお昼を食べる関係にまで持ってこれた。自分を、話をよく聞いてくれる孫だと、勘違いするよう働きかければいいだけのことなのだ。特別なことなどないもしていない。聞いて笑ってまた聞いてを繰り返した結果がこれ。休日のお昼は親がいなんだ、と嘘を試してみたらすぐに昼食に誘ってくれた。ただそれだけの話。

「ええとでも、駄目なら駄目でいいんですけど」

可哀想な女の子を演じた。おじいさんなら放っておくはずがない。

「別にいいじゃろ、家に昼ごはんがないんだと」

「はあ、勝手にしてくれよ。僕はもう帰るから」

そう言った高梨はなにやら荷物を持って去って行った。夏美は、ガラス戸を開けっ放しで門の外に出ていった彼の姿を、見えなくなるまで見つめていた。理由はわからないが、孫の高梨とやらは、相当おじいさんに鬱陶しがられているらしい。

「さ、あがつてあがつて。おいしいみそ汁とごはんを用意しておいたよ」

夏美はとっさに振り返った。「ありがとうございます」と告げてからガラス戸を閉め、店の奥へと足を運んだ。

## 尾行

休みが明けて月曜日。

小守が鋭いまなざしでノートに目をやり、勉強をしているところに割って入る夏美の声があった。

「昨日はついに、あの店の内部に侵入することができました！」

「おう、よくやったな」

そこまで話して、夏美は笑顔を見せた。

壁一面を覆い尽くすようなガラス張りの窓からは、テニスコートや運動場が見え、絶えず汗を流して練習する部員の声が届いている。テスト前だからと言って、放課後すべての部活がなくなるわけではないらしい。

「えーと、あのおじいさんなんですけど、理由は聞けませんでしたがお孫さんのこと相当嫌ってましたね。逆に、おじいさんは家族や親戚からのけ者扱いされてるようです。強情な気質みたいで」

「まあ、あの態度じゃバレバレだな」

小守の俊敏なペン先がノートの上を舞う。

「そういえば、例の家にお孫さんが来てみたいですよ」

「孫？　どんな人だ？」

「背の高くてすらつとした人でした。頭もよさそうでした」

自分が発見した成果を報告して、夏美は大満足だった。先輩の知りえない情報を伝えることに喜びを感じていた。

「どうですか？　少しは私を見直しましたか？」

「いや」

小守はペンを置いて夏美を見た。

「高梨って人のことだろ？」

「あれ、なんで知ってるんですか？」

「お前最初、搜索を放棄して帰っただろ？　俺はあるとき、一人であの店まで行ってその高梨って人に会ったんだ。なにやらおじさん

と口論してたみたいだったぞ」

「口論？」夏美は顔を傾けた。「どんな口論だったんですか？」

「店の外からだったからよく聞き取れなかったがな、察するに、高梨って人はあのおじいさんをどこか別の場所に移住させようとしていたらしい。それに怒ったおじいさんが抵抗して怒ってた。あのおじいさんは長年付き合ってた妻を失くして一人暮らししてたそうだから、おおよそ、心配した孫がやって来て、自分の家におじいさんを連れていこうとしてるんだろっな」

「ああ、それで」「夏美は、おじいさんが孫の話を嫌う理由を悟った。小守は夏美が漏らした声を気にすることもなく、またペンを持って教科書と向き合った。

「え、先輩はもしかして、たった一日でそこまで調べ上げたんですか？」

「まあな。孫の高梨って人と会えたのは自分でも幸運だと思う」先輩はペンで記述式の解答欄に文字を書きこみながら続けた。「夏美は会うのに数日かかったわけだからな」

それを耳にして夏美は落胆した。

「じゃあ、私がやったことはまったくの無意味だったってことですか？」

「そうでもないぞ。話を聞く限り高梨は今、あの家に住んでいるってわけじゃなさそうだな。仕事終わりに通ってるとか、そんなところか。それがどうしたって思うかもしれないけどな」

夏美は先輩が言った通りのことを思っていた。クマのぬいぐるみを置いている店と、白河綾との関係性が見えてこない以上、あの店をいくら調べても意味がないんじゃないだろうか。

「先輩」

「なんだ？」

「先輩はなにか掴んでるんですね？ あの店を調べる必要があるって思うなにかを」

小守は、文字を書く速度を緩めて答えた。

「あの店になにかあるんじゃないか、くらいには思ってる。でもそのなにかをはつきりさせるためには毎日行っ探りを入れるしかない。今日は俺も一緒に行くから、支度してくれ」

小守は解答途中のノートと教科書を鞆に放り込んで、学校を出る準備を始めた。

「え、先輩も行くんですか？」

「勉強したいが仕方がない。高梨って人に会うには毎日行くしかないさそつだからな。今日からは俺も付き合うよ」

「やややや、やったあ！」

夏美は喚起した。先輩とデートできるっ！ なんにも苦しいことなんてないっ！ やったあ！ と心の中で叫んでいた彼女の感情を、あの女が、あの女の声が、嫌な感じの色に上塗りした。

「す、すいません……？」

扉から顔だけ入れて中を覗き込んでいるのは、白河綾だった。

夏美はその姿に向かいびしっと指さす。同時に叫ぶ。

「まだ見つかってないから帰りなさい！」

そんな訴えを聞いて、「そうじゃないんです！」と嘆くように言っ綾は入ってきた。

「今日はピアノ教室があるので、私が直接探しに行くので、大丈夫です」

申し訳なさそうに言う綾に、夏美が抵抗した。

「いいえ！ 今日は大事な日だから行きます！ どいて！」

もう支度を終えていた夏美は綾を押しつけて廊下に出ようとするが、綾はそれを阻止した。

「き、今日はいいです！ 本当にいいですから！」

「よくないよくない！ クマのぬいぐるみを早急に探してあげるんだから邪魔しないの！」

夏美は徐々に綾の足を滑らせていく。帰宅部が運動部に敵うはずがないのだ。

すると小守がぼつり。

「わかりました。今日は白河さんにお任せしましょう」

夏美が振り向くと、先輩はまたも教科書とノートを開いて勉強に没頭していた。

「どうしてですか！？ さっきまで行く気満々だったじゃないですか！」と、どうしてもデートをしたい夏美はやむを得ず反発する。

「別に明日でも問題ないだろう？」

小守はそう言って笑った。夏美に向けられたその笑顔は反則的だった。途端に恥ずかしくなった夏美は部屋の隅っこで縮こまり、熱くなつていく体温を冷まそうとした。その足元には、ナボーナの入った袋があつた。

「そういうことですので、今日は白河さん、あなたにお任せします」

「あ、はい。なにかあつたら、明日の朝にでも報告しに来ますので……」

綾はバタバタとした動きで頭を下げながら廊下を駆けて行つた。

次第に音が小さくなつていき、部室内には届かなくなる。すると小守は立ち上がり、真後ろの窓から地上を見下ろした。そこには小さくなつた綾がいて、先ほどと同じように慌てふためいていた。校門を出たところで見えなくなつてしまったので彼はまた席へと戻り、さらに勉強に精を入れた。

それから十分以上が経つた。いまだ端っこの方で縮こまっている夏美に、先輩である小守が声をかけた。

「おい夏美、そろそろ行くぞ」

夏美はヘッドホンで音楽を聞くような体勢で小さくなっていた。

「夏美？」

返事が返つてこないの不思議に思つた小守は、席を立ち、夏美の元まで足を運んだ。

夏美はほとんど動かないまま、耳を塞いでいて、なにも聞こえていないようだった。

「おい、そろそろ追いかけるぞ。尾行だ」

小守は夏美の耳を塞いでいる手を左右に押しのけた。そこで気づ

いたのか、夏美はしゃがんだまま先輩の顔をはつとした表情で見上げた。その口にはナボーナが咥えられている。

「なに食ってんだ！ いいから白河綾を追いかけるぞ！ 支度しろ！」

「んむみまみも〜！」

奇怪な日本語を放ちながら、夏美は先輩に言われた通りに急いで身支度をした。そしてようやく二人は尾行を開始した。

## 小守悠介の思惑。 その1

白河綾を尾行するとか何とか言っていた気がするが、学校を出た時点でもうその姿などない。十分以上も間をあけていたのだからそれは当然。小守先輩は早歩きで道を進んで行く。なんだか追いつくだけで精いっぱいだった夏美は『羨望駅』を出るまでほとんど喋らないで過ごした。

「先輩、あの女の背中すら見えなかったんですけど、よかったですか？」

夏美はようやく質問を投げかけた。いつもより長く学校に居座っていたせいとか、お月さま以外真っ暗な空の中、『羨望駅』到着した。「むしろ尾行がばれなくて好都合だろ。行き先は割れてんだから」そうか、と夏美は安堵した。あの女は、この広大な住宅街の一角にある小さなピアノ教室に向かったんだ。あと数十分もすればその足取りを証明できる。ついでに、開校しているピアノ教室をこの目で確認できるので一石二鳥だった。

街灯が粉雪のようにちらほらと付き始めた頃、二人はそのピアノ教室のまん前に到着した。時刻は夜の八時を回っている。予想通り明かりが付いていて、レースカーテンの内側でピアノを弾いている様子がうつすらと見えた。

「ねえ先輩？ 弾いてるの見えるんですけど、音が全然聞こえませんかよ？」

「防音の処置がしてあるんだろ。こんな遅くにレッスンしてるんだから当然だな」

夏美は門から上半身を乗り入れて耳を傾けていた。

「これからどうするんですか？ あ、一緒に夕食食べましょうよ？ この駅前にね、おいしそうなフランス料理屋さんを見つけたんですよー！」

「ん？」

辺りを見渡しながら、小守は興味のなさそうに呟いた。

「ええっと　鮭のムニエル、春野菜のテリーヌ、んでもって、豚肉と白菜のミルフィーユなんてのもありましたよ！　ああ、先輩と一緒に食べたいなあー？」

「……………」

腹ペコの夏美は、夕食に気持ちを向けていた。

「さっきも見たんですけどね、意外にリーズナブルな値段でしたよ。それに一緒に食べたら、なにか特別な気持ちが芽生えるかも…………！」  
ピアノ教室の前できやあきやあはしゃぐ夏美に、先輩の小守がなだめるようにして言った。

「尾行はまだ、終わっちゃいないぞ？」

「え」鞆をぶんぶん振りまわす夏美が静止した。「どういうことです？」

「実際に白河さんがここから出てきて、家に帰るまでがちゃんとした尾行だ。それによつて、なにを隠しているのか、俺たちになにを求めているのか、もっとはつきりわかるかもしれないからな」

「ええええええええ！」

夜空に轟く夏美の声。結構遠くにいた会社帰りのサラリーマン風の男が、ちらりと二人の方に目線を注いでいた。

小守先輩は、普通、一回のピアノレッスンはだいたい三十分から一時間ほどだと言っていた。その間に夏美は帰ろうかどうか少し悩んだが、やはり最愛の先輩を置いて帰ることはできず、先輩と一緒にピアノ教室から少し離れた壁にもたれていた。

「なに読んでるんですか？」

暇を持て余した夏美が、先輩の手元を覗き込んだ。

「小説だ。推理小説」

小守はなんのためらいもなく、目線すら逸らさずに読書が続ける。せっかくインテリな男子学生に見えそうになる小守だが、ネクタイを好まず気崩ししているので不釣り合いとも思える絵図らだった。それでも夏美は、迷わず言った。



「先輩らしいですね」

「そうか？」

そして会話は途切れた。さっきからこんな感じで先輩の隣にいる夏美は、なんとか自分に意識を向けさせようという努力を惜しまない。

「い、いつ行きます？ この依頼が終わったら、一緒に食べに行きましょうよ？ ね？」

大げさな身振り手振りで先輩の視界に潜り込むようにして、夏美は必死に先輩との会話を試みる。先輩である小守は小守で、星を見る余裕すらないように、静かに街灯と月明かりを浴びながら、本の見開きにある活字を目で追っていた。

「あ、じゃあ、わかりました！ 私が今度お弁当作ってきますよ！先輩のために！」

さすがの小守も視線を移さざるを得ない。

「なんだって？」

「お弁当ですよお弁当！ 先輩は一銭も出さずに経済的っ！ おにぎりばかりじゃ、先輩は栄養失調で倒れてしまいます！ そうしたら私は困ります！ だから、先輩の栄養分は私が守ります！」

夏美は青い顔になって思い出していた。勇気を出して仲直りしたあのときの屋上で、先輩は数個のおにぎりを頬張っていただけだった。きつといつもそうなんだろう。先輩の体調がすごく心配になった。

「断つても無駄ですからね。私は本気です」

小守はなにも言わず、目線だけで訴えている。しばらく雄弁にお弁当の良さを語る夏美に付き合っていた小守だったが、ふいに一言呟いた。

「夏美って、弁当作れるのか？」

そんな根本的な疑問に夏美は狼狽する。

「っ、作れますよ！ 週に十二回はお弁当作ってるんですから！」  
「ただ忙しんだよ」

小守はそう突っ込んでから、また読書に耽った。

「とにかくっ！ 私が言いたいのは」と夏美が言いかけた矢先、小守は「待て」と夏美の口元に自分の手をかぶせた。

「ふがっ！」

「誰か出てきたぞ」

ぼつりとそう言われた夏美は、電柱の陰に隠れた先輩のそのまた後ろに隠れてピアノ教室を凝視した。一人の女の子と、おそらくはピアノの先生だろう人が、門のところで喋っているのが見えた。数分語らっていたその二人は、お互いに手を振って別れてしまった。

「先輩、あの」

「なんだ？」

その一部始終をきちんと見ていた夏美は、自分の感じたことを打ち明けた。

「今のつて、どうみてもあの女じゃなかったですよ？」

「よく見てたな。その通りだ」

出てきた女の子は、銀縁の眼鏡をかけた、小学生か中学生くらいの子供だった。夏美は自分が見た光景が間違いじゃないかと不安だったが、あっけなく先輩は同意してくれた。

「なんであの女がいるはずのピアノ教室から、あの女以外の生徒が出てくるんですか？」

「個人レッスンとは限らないだろ。二人いっぺんにやってるかもしれないし」

「それはないと思います。私さっき教室の中見てましたけど、先生と生徒、一対一のレッスンにしか見えませんでした」そう言ってまたすぐに喋り出した。「あつ、もしかして先輩、あの女がここから出てこないってわかってたんじゃないですか？」

「どうしてそう思う？」

言われた夏美は、先輩の顔をじっと見つめた。

「だって先輩、全然驚いてないですもん。なんか、思い通りになっ  
て喜んでるみたいな顔してますもん」

たまに妙な理論を組み立てる夏美に、小守はそっけなく言った。

「わるかったよ。実はな、今日俺が尾行しようと思ったのは、白河綾がピアノ教室に通ってない、ってことを証明するためだったんだ」  
夏美はびっくりして一瞬、言葉が出なくなった。

「なんで来てないって、思ったんですか？」

「いや、来てないと思ったわけじゃない。来てないほうが腑に落ちると思っただけだ」

夏美は先輩の言っていることが理解できなかった。

「わかんないんですけど？」

「説明すると長くなる。俺は、あの先生と会ってくる」

小守は本を鞆に仕舞って、ピアノ教室に近づいていった。

「あつ、私も行きます！」

誰かの背中をいつまでも追いかけていそうな健気な夏美が、小守の背中に吸い寄せられるようにして付いていった。

## 小守悠介の思惑。 その2

ウェーブをかけた髪の毛が特徴的なピアノの先生は、かなり親身になって、白河綾について二人に話した。それもそのはず。綾が先週のピアノ講習から急に来なくなつて、先生自身も心配していたのだという。何度か綾の自宅には電話を入れたらしいが、在宅していないのか、まったく反応がないんだと、訪ねてきた二人に伝えた。

「僕たち、白河綾さんと友達なんです。学校で直接、白河さんに連絡しておくのでご安心下さい。来週までにはまたここに伺えると思います」

小守は瞬間に気崩していたネクタイを正し、礼儀正しい男子生徒になり下がつてそう言った。ピアノの先生は「じゃあ、なにかわかつたらここに連絡してもらえます？」と申し出て、携帯の番号を彼に教えた。「コンクールも近いから、心配なんですよ」

「そんなものがあるんですか？」

夏美は、綾がコンクールに出るほどの腕前を持つていることに心底驚いていた。

「今年ね、私が教えているのは綾ちゃんだけなのよ。だから綾ちゃんだけが出るってわけ。それで生徒が一人しかいなくて、月曜日しか開校してなかったの。この教室もすっかり廃れちゃってね。本当は、今日も綾ちゃんをみる予定だったんだけど、さっきちょうどピアノを習いたいって子が来てね、久しぶりだったから体験入学させてあげたの。途中で綾ちゃんが来るかななんて思ったんだけど、やっぱり来なかったわね」

ピアノの先生は、ここから少し離れた場所に住んでいるらしい。

このピアノ教室は規模の小さい別荘みたいな感覚なんだという。週に一度だけ月曜日の夕方にここにきて、綾を待っていた。今日来なかったら、直接、家を訪ねてみようかと考えていたらしい。夏美は、ふーんと思つてほとんど聞き流していたのだが。

小守が、先生との別れ際に質問した。

「ちなみにですけど、最近、クマのぬいぐるみを見た覚えがありますか？」

「いいえ、どうしてそんなものを？」

「そうですか。いえ、ちょっとしたことなんで、お気になさらないで下さい」

小守はそう言ってから、ありがとうございますとお礼を口にした。そのあと二人は先生と別れを告げて、今度はクマのぬいぐるみの店へと足を運ぶことになった。

「せんぱい、疲れましたあ」

夏美の歩き方は重々しく、足になにかトレーニング用の器具をつけているようなだるさが垣間見れる。

「おじいさんの家でなんか食わせてもらえるかもしれないぞ？」

小守は少し先を歩いている。

「えつとですね、あのおじいさん、最初だけは夕食に誘ってくれたんですけど、きっぱり断っちゃったからか警戒されて、二回目のお誘いはありませんでしたよ。だから実は、家に上がるのにすごく苦労したんですよ」

おじいさんへの期待はいささか薄い。だから夏美は余計に疲労感が増えてしまった。

「じゃあ帰っていいぞ」

「嫌です！」

そこだけは彼女の譲れない正義らしい。小守は少しばかり頭を抱えていた。

余計な寄り道をせずにまっすぐとやってきたので、かなりの速さで例のお店に到達した。こんなに早く付ける位置にあったんだと、夏美はげんなりとした。

「ん？」

小守は門を開けずに耳を澄ましている。

「入らないんですか？」

「どうやらこの家は、防音の設備がないらしいな」

夏美も黙り込んで周囲の音に集中した。すると、お店の中から小さな声が漏れていることに気づいた。なにやら言い争うようなその小さな声を、なんとか捉える事が出来た。

おじいちゃん、どうしてわかってくれないんだよ。ここにいたら危ないってば。

それが孝行のつもりか。わしはここを動かんぞ。ここで生きてここで死ぬんだ。

ちよつと地震が起きただけでも崩れそうな家に、いつまでも住まわせておくわけにはいかないんだよ。こっちの身にもなってくれよ。

知らん。何度も何度も邪魔するように来やがって。いい加減出ていけ！フリーターの孫なんぞ持つんじゃないわい！

おじいちゃん！

足音をたてないようにして近づいていった小守が、ガラス戸を引いた。

「お取り込み中、失礼します」

彼は両足をそろえて礼をした。その後ろから、心配そうに店内を見渡す夏美が顔を出している。店内には、立って話し込んでいる孫の高梨と、その祖父である丸坊主のおじいさんがいた。おじいさんは、一段高くなった玄関先に座りこんであぐらをかいていた。

「あ、昨日の……」と高梨が夏美を見て声を漏らした。「なににいらしたんですか？」

「少し、家庭の事情に首を突っ込もうかと思ひまして」

うるたえている後輩に耐えかねた小守が、単刀直入にそう伝えて、おじいさんと高梨に目配せした。

「君もこの前の……でも、どうしてそんなことを？」

「どうやら最近、ここのおじいさんが困っているという噂を小耳に挟

みまして、なんとか助けてあげられないものかと、思ったままです」

小守は適当な理由をつけて高梨を見据えた。

「困ってる？ それはもしかして、僕が困らせてるってことかい？」

「その質問は俺ではなく、おじいさんにお渡しします」

小守の目線を感じたおじいさんは、ピクリとまゆを吊り上げてから、嫌な笑みを浮かべて発言した。

「最近、このウチから言い合うような大声が響いてきてうるさいっていう苦情が来てるんじゃ。頼むから、もう本当に、わしのことは放っておいてくれないか？ この通りだ」

あぐらから正座に変わり、おじいさんは頭まで下げて急に低姿勢になった。それからもう一度口にした。「頼む、この通りだ」

それを見た高梨は、口論を盗み聞きしていた二人の学生を一瞥してから、不満そうな顔を作った。

「僕は好意のつもりでやってるんだけどね。でもわかった、そこまですうなら、今日のところはもう帰るよ。でもねおじいちゃん。もう一度だけ来るから、そのときは覚悟しておいてよね」

高梨はアタッシェケースから帽子を取り出して深くかぶり、すたと店から退散した。これで見送るのが二回目になった夏美が、先輩の袖を引っ張って耳元で囁いた。

（あの、いいんですか？　なんかこんなので？）

状況を不安視した夏美は、つま先立ちになってちょっと背の高い先輩に問いかける。

（詳細を聞きだす絶好のチャンスだぞ）

先輩の小守はそう言い切って、おじいさんの目の前に歩み出た。

「瑣末な嘘に乗ってくれて、ありがとうございました」

「いやいや、わしこそ助かったわい。君が機転の効く子でよかった。先週来てくれた子だね」

おじいさんは小守の機転を受けて、有りもしない事実を語っていた。毎回の口論が近所迷惑になっている、という架空の事実を。

「高梨さんと言うお孫さんは、いつからここに來てるんですか？」

「一ヶ月くらい前からじゃな。バイトが休みの月曜と日曜に、立て続けに帰って来るわい。頻りに『一緒に住まないか?』って尋ねてくるんじゃよ。迷惑なことこの上ないわい」

おじいさんは、吐き捨てるようにそう言った。

「どこで一緒に住もうと?」

「聞いてないわい。ラジオの音でかき消してやったわ!」

かなり頭に血が上っているらしく、おじいさんはまた、正座からあぐらに戻っていた。

「じゃあちよつと、協力させてもらえませんか?」小守は前かがみになりながら頼んだ。

「それは嬉しいことじゃが、どうして?」

「わかりませんか? おじいさんがこの店からいなくなると、これからここに、クマのぬいぐるみを買いに来る人たちが可哀想じゃないですか。せつかくブームの兆しが見えたんですから、勿体ないと思いますよ」

笑顔でそう伝えると、後方いた夏美も隣までやって来て「私もそう思います!」と後ろ盾になった。するとおじいさんは、やわらかく表情を崩して言った。

「嬉しいね。じゃがこれ以上、孫の話はよしてくれ。胸くそ悪い!」

おじいさんはあぐらをかいたまま、二人の協力者を得てもなおご立腹だ。

小守が藪から棒に提案する。

「じゃあこうしましょう。俺の携帯番号をお渡しします。もしなにか高梨さんとの間に進展がありましたらご連絡いただけますか?」

今日はもう帰りますので」

「……それなら、まあ」

承諾したものの一步踏み出せないおじいさんは、ためらいがちに立ち上がり小守の携帯番号を受け取った。



## 果たし状（前書き）

ここまで読んでくださっている方、あるいはたまたま来てくださっている方。

このページを開いていただき、本当にありがとうございます。

少し忙しくなってきたため更新ペースを落とすことをご報告いたします。

## 果たし状

五月二十三日、火曜日。試験が始まる土曜日まで残り五日となった。白河綾の弟の誕生日までで計算をすると、あと四日しかなかった。

綾は、自分が設定した残り四日という現実を恨んでいた。確かに早急にあれの真偽を調べる必要があったが、いくら学年一位の天才だとしても探偵と言うわけではない。勉強ばかりしている人みたいだし、やっぱり無理だったのだろうか。素直に自分の気持ちを暴露して、恥ずかしい気持ちをぐっと抑え込んで頼みに行けばよかったのだろうか。終わりのホームルーム中、先生の話など全く耳に入らずに綾は一人で葛藤していた。こんなことなら、最初から自分で調べればよかったのかもしれない。いやでも、それはやっぱり怖いし、なにより、あの人に迷惑をかけてしまう

考えれば考えるほど、どれがよい選択肢かなんてわからなくなり、頭の中がぐちゃぐちゃに絡んでいる毛糸のような状態になった。初めから考えなどまとまっていけない。もう一年も考えに考えて出した結論の行く末がこんな状態なのだから、誰になにを言われようともこのまま突っ走るしか道はなかった。

それと、いつもいつも長々と喋るこの先生はあまり好きじゃない。おかげで、四階の部室に近況を聞きに行くのがかなり遅くなってしまう。といつてもいまだクマのぬいぐるみを探しているだけの状況だし、今後も進展はなさそうに思える。そもそも自分は歓迎されていない様子だったから、もうほとんど、期待はしていないのだが。「起立、氣よ付け、礼！」

ようやく先生の号令がかかった。すると一斉に生徒たちが礼をし、三年A組は解散した。

その中で一目散に廊下に出たのは綾だった。今までのように時間に追われるふりをしていれば、誰からも怪しまれたりしない。とりあ

えず今日も、いつも隠れ家になっている私立図書館へ行って勉強でもしよう。

そうしてクラスの誰よりも早く階段を下りていく。最初の踊り場を通って次の階段に足を伸ばそうとしたそのとき、二階の階段前にあの子が佇んでいるのが見えた。

「私の大事な先輩が、あんたに聞きたいことがあるらしいから、来てよ」

いきなり声をかけられた。速度を抑えきれない綾は、思わず倒れそうになった体重を手すりを掴むことによつて防いだ。一旦どうしようか迷ってしまったが、ここで引き下がったら今まで練ってきた計画が全部パーになつてしまう気がした。一度手すりを握りしめてからまた走り出し、綾は夏美の目の前を通過しようとした。

「いたっ！」

綾は、がくんとなつて前に進めなくなつた。見えている次の階段に足をつくことができず、彼女は夏美に片手を掴まれてしまった。この子の力は女の子の綾からしても強い。昨日だったか、一度、四階の部室の中で競り合いになつたときに、正確にそう感じていた。

「は、離してよ！ 私忙しいんだから！」

ここで捕まつてはいけない。そう思つて振りほどこうとするけど、夏美はその抵抗を微動だにせず受け止めていた。

なによこの子、なんなのよこの子っ！

「どうせぬいぐるみ見つかつてないんでしょ！ わかつたからもういいから離して！」

綾は、こんなにも大声で必死になつていている自分に違和感を覚えた。こんなに熱くなつたのは久しぶりかもしれない。数年ぶりかもしれない。

ふいに、夏美の手が離れた。

チャンスだ。

「じ、じゃあね！」

だいたい時間をロスしてしまつたが、本当に急いでるわけではない

のでどうでもよかった。とにかくこの学校からできるだけ離れた場所に行ければ今はそれでいい。

一つ下の踊り場で方向転換したとき、上から夏美の声が降り注いだ。

「どうせ急いでなんかいないくせに！」

その叫びで綾は、ピタリと足をとめた。

「昨日、ピアノ教室サボってたでしょ？ 私たち、ちゃんとか確認かめに行ったんだからね。先生にも会って、ちゃんとか確認取ったんだから」

そ、そんなことって……！

探さなくていいよって、ちゃんと昨日伝えたはずなのに。小守くんは明日でいいって言うってたのに、あれはもしかしてはったりだったの？ じゃあもう、私がなにをしようとしているのか、全部全部バレてしまったの？

「あんたは先週からピアノ教室に行っていない。それを心配したピアノの先生が家にいくら電話しても出てくれない。つまり、こう考えることができる。ピアノ教室に行っていないのは、度重なる習い事に嫌気が差したから。家にいくら電話しても出ないのは、電話線が引っこ抜かれてるからだろうってね。いまだき家電なんかほとんど使われないし、かかってきてもろくでもないセールスが多いから、電話線ごと引っこ抜いて親に気づかれなくてもなんの不思議もないわよね？」

夏美は、すべてお見通しと言わんばかりに声を張り上げる。

「ちなみに、あんたが依頼の報酬として持ってきたナボーナあるでしょ？ あれをあんた最初に、『家から勝手に持ってきた』って言ったのよねえ。怪しいよねえ、どうして勝手に持ってきたんだろう？ ……ん、あれあれ？ もしかしてもしかすると、親に反抗しようとして勝手に持ってきたやつ？ たった三千五百円のCDも手持ちで買えないところを見ると、余計にそう思えるのよねえ？」

夏美は、昨日先輩から聞かされた推理を武器にして、言葉の端々

にこれでもかと嫌みを詰め込んで綾を挑発した。「ひよつとすると、全部の習い事サボってる可能性もあるから、待ち伏せてみろって先輩に頼まれてきたのよ。お金がないなら習い事が終わる時間まで、図書館とかに身を潜めてるって予想でね。そうしたら案の定、ってことよね？」

綾は壊れかかった精密機械のように、きごちない動作で首を動かし、夏美を見上げた。その夏美は偉そうに腰に手を当てて、この状況を楽しんでいるように口元を緩めている。

「ど、どこまで知ってるの？」

別に、知られてもいいこともある。というよりも、知ってくれないければ話は進まないのだ。でもすべてを知られてしまったら最後、私はもう恥ずかしくて死んでしまふ。どうか神様、私の思い通りのところまでバレていきますようにっ……！

「それは私じゃなくて、白坂高校で学年一位の小守大先輩に聞いてくれる？先輩は部室で待ってるから、早めをお願いね。私たち、あんたに構ってる暇なんてないんだから」

すると夏美は、綾を呼びとめもせずに階段をゆっくりと登って行った。踊り場で立ちすくむ綾は、幸運を祈って付いていこうと決心した。そんな彼女の横を三年A組の生徒たちが雑談しながら降りていく。楽しそうに喋っているクラスメイトには目もくれず、綾は覚悟を決めて、四階の、あの部室を目指した。

## 半信半疑の誘導尋問

コンコン。

ここの扉をたたくのは初めてだった。綾は、慎重になっている自分に気づいてしまった。いまさら律儀になったって、なにも変わらないのに。どうしてこんなに、自分は中途半端な人間なのだろうか。情けない。本当に情けなくて、いますぐにでも帰ってしまいたかった。

「どうぞ」

そんな綾を呼び止めるように、中から小守の声が響いた。綾が慎重にと扉を開いていくと、その小守は真正面の指定席のような席につき、さらさらとノートに文字を書き綴っていた。そして、その彼の少し横。部室の隅っこの方には、夏美が椅子に座っていてなにかを食べていた。あつ、私があげたナボーナだ。

「座ってください」

そう促されて、綾は思い出したように機敏に動きだし、机を挟んで小守の前に用意されてあった席についた。そのとき少し慌ててしまい、椅子を少し引きずってしまったので耳障りな音が響いてしまったけれど、小守も夏美も、まったく気にしていない様子だった。

「あの、クマのぬいぐるみは、見つかったんでしょうか……？」

綾は姿勢を低くして、小守の顔を覗き込むように尋ねた。

「見つかりましたよ。夏美、頼む」

指名された夏美は大きな声で「はい！」と宣言した。すると彼女は、ナボーナの箱を仕舞っていたと思われる紙袋の中から、クマのぬいぐるみを掴み取って一度掲げた。それから小守の前の机まで持ってきて、どかっに乗つけた。

「これが、白河さんが探していたぬいぐるみですよね？」

「えっ、はい」

部室の隅っこに夏美が戻っていく。それに少し気を取られながら、

綾は目の前に置かれたぬいぐるみを手に取った。綿菓子のようにふわふわで愛らしいクマのぬいぐるみだ。茶色い毛並みは何度触っても心地よい。ちょっと見つめあってみると、いまにも飛びついてきたくれそうな、そんな幻覚を見てしまうくらいだ。

でも、どうやってこれを見つけたんだろう。だって私は、クマのぬいぐるみなんて落としてはいないのだから。

「なぜでしょう。念願かなってクマのぬいぐるみが戻ってきたというのに、俺には、白河さんが喜んでいようには思えません。喜ぶ表情が苦手ならば話は別ですが」

一瞬ひやつとして、よくよく考え直してみると、綾は余計にひやつとした。

「初めから、クマのぬいぐるみなんて落としていない。ですよネ？」

小守に優しく声をかけられて、綾はどうすればいいかわからなくなった。でも、この部屋に来るまでに心したはずだ。昨日ピアノ教室に行かなかったことがバレている以上、それ以外のものもバレているのだろうと。それに精一杯対抗してみようと。

「い、いえ。これが探してもらいたかったぬいぐるみですよ。見つけていただいて、本当にありがとうございます！」

綾は、クマのぬいぐるみを抱きしめながら立ち上がり、頭が床についてもいいという気持ちでお辞儀した。しかしそこからの行動が思いつかない。どうすれば自然か。どのようにすれば隠し通せるのか、皆目見当もつかない。

しばらくそのまましていると、ふと小守がつぶやいた。

「聞かないんですね。どこに落ちてたのとか、どうやって見つけたとか。白河さん、この前はすごく気にしてたようでしたけど」

なにもしないことで墓穴を掘ってしまったらしい。綾はとっさに小守を見据えて訊いた。

「あつ、喜びすぎて忘れてました。あの、どこでこれを？」

机には、ばら撒かれたルースリーフとノート、そして教科書が置かれている。そのそばに置いてあるライトスタンドが、ついてもし

ないのに光っているように見えた。

「昨日もらってきました。このぬいぐるみを売っていたお店のおじいさんにね。俺たち少し、親しい関係になっていたんでそのお礼だそうです」

「えっ」

思わず言葉を失った。頭の中が真っ白けっけで、魂が抜けてしまったかのように動くことができない。

「まだ隠すつもりですか？　ここに依頼に来た、本当の目的を」  
「……」

どうしようどうしよう。いきなり限界が来てしまったのか。もうダメなのか。

「ああ、失礼しました。取りあえず座ってください。俺は別に、白河さんを追いつめたくて呼んだわけじゃないんです」

片手で座るように指示された綾は、はっとなって席へと腰を下ろす。

「あなたが、本当の目的を隠したがる理由も、わかっているつもりです」

その瞬間に、綾は思った。

この人に、不正なんてものは通用しないんじゃないだろうか。懸命に言い訳をしても、まるで簡単なパズルのように紐解かれてしまい、正解を提示されてしまうのではないか。どれだけ高上な嘘をついてその場を引つかきまわしてみても、元の状態を知っている神様のようにすべては元通りに再構築されるのではないか。妙な熱気。氷川夏美とは少し違う威圧感を、白河綾は肌身で感じていた。

「俺の話を聞いてください。それから、白河さんの意見を下さい」  
小守は机に置いてあるものを整理して、すべて鞆に仕舞った。それからじつと綾の顔を射るように見つめながら、彼女の頭の中でも透視するかのごとく話した。

「俺が、まず最初におかしいなと思ったのは、白河さんがここで相談内容を語ってくれたときでした。あのときあなたは、非常にわか



りやすい嘘をついた。弟のプレゼントを探しているという嘘です。弟さんが本当に誕生日を迎えるかどうかはわかりかねますが、少なくとも、クマのぬいぐるみをプレゼントしようとは思っていない。なぜなら、誕生日のプレゼントを、わざわざその三週間も前の、それもピアノ教室帰りに慌てて探し、用意する必要性なんてどこにもないはずだからです」

綾はだたじつと、机の木目に目線を注いで話を聞いていた。

「クマのぬいぐるみを落とした記憶がないのは当然です。落としていないんですからね。さきほどのあなたの挙動を見る限り、間違いないさそうです」

すると突然、部屋の隅から夏美の声が割って入ってきた。

「それはもう聞いたんでいいんですけど、どうしてこの女はそんな下らない嘘までついて依頼しに来たんですか？」

釈然としない様子の夏美に少し顔を向けてから、小守は続けた。

「夏美、俺が昨日頼んでおいたもの、持って来てくれたか？」

綾は顔を上げて、二人のやり取りを確認した。夏美は「ええまあ」と曖昧な返事をして、足元に置いてあった鞆の中から、小さなケースのようなものを取り出して小守に手渡した。

「これがなにかわかりますよね？ おそらくあなたが、この世で一番大事にしているものだと思うのですが」

綾は、小守が両手に持っているものを見て驚愕した。

「いかがですか？」

「別に、そんなんじや……」

綾はそのものから目をそむけた。人前で直視することを極端に避けていた。

「これは、あなたが弟にプレゼントしようとして偽っていた、ウルス・ザ・ベストというCDです。ビジュアル系バンドのウルスが、インディーズ時代を含めた十年程で、ようやく集大成のアルバムを出したそうです。ああ、昨日インターネットで調べただけですけど」

言って、小守はそのCDを綾の近くに置いた。その綾はまだ、目

線をそらし続けている。

「先輩、それがどうかしたんですか？」

夏美は手に残ったクリームをなめながら言った。

「このリーダーのヨシキってやつ、どこかで見たことないか？」

先輩の言葉につられてやってきた夏美が、「ヨシキ？」と言つてCDを持ち上げ、顔の近くでじつと見つめ始めた。しかし三十秒経つても首を捻っているようなので、小守がそれを取り上げた。

「あつ、待ってください。もうちょっとでわかりそうなんですから！」

「嘘をつけ。お前一瞬寝てただろ」

夏美は、あまりにもつまらなかったり理解できないことが脳内に流れ込むと、どんな格好でも居眠りしてしまう。そんな性格を小守は知っていた。

「俺も最初は半信半疑だったけどな、顔や輪郭、背丈も踏まえるとあの人と一致するはずだ」

「誰なんですか？ 私はこんな有名人に会った覚えはないんですが」  
CDを机に戻した小守は、俯いている綾の顔を一瞥してから告げた。

「これは、クマのぬいぐるみを売っているあの店にいた高梨さんだ。ですよ、白河さん？」

振られた綾は全身に力を込め、必死になにかを耐えていた。

「ちょ、ちょっと待ってください！ あの人がこのボーカルのわけないじゃないですか！？」

「夏美、どうしてそう言える？ 顔や背丈は間違いなくこのヨシキだったぞ？」

「ただだだってだって！ いまだ活動を続けている大人気バンドが、どうしてフリーターなんてやってるんですか？ おかしいです！」

「大人気つてのは数年前までの話だ。今はトップサーティにも入れずに奮闘してる三流バンドだ。昨日インターネットで十二分に調べたから間違いない。今は、アルバイトでもしないと食いつないでい

けないところまで落ちてるんだよ」

「そんなんっ！」立ち上がった夏美が絶望する。「そんな馬鹿なっ！」  
「で、でもですよ？ あの高梨さんが、どうしてウルスのヨシキさ  
んだって言い切れるんですか？ ウルスってバンドは確か、ニック  
ネームしか明かしていなかったはずですよ。そもそもヨシキというの  
が本名かどうか判断できませんし、それにいつも化粧してて、全然  
すっぴんなんかわからないじゃないですか！」

心からの夏美の叫びに、小守が答えをくれてやった。

「昨日、無理にでも聞けばわかっただろうけど、あのおじいさん  
にお孫さんのフルネームを聞けば一発だろうな。でもそんなことしな  
くても、フランス語でこの問題は導ける」

「え？」

先輩の言葉に、夏美はきょとした。

「昨日、夏美が俺をフランス料理に誘おうとしたときに気づいたん  
だ。『クマ』をフランス語に直すと『ウルス』になる。ビジュアル  
系バンドのウルスと、クマ関係ばかりを売っているお店、そしてク  
マのぬいぐるみを追い求めている白河さん。この三点に気づいたと  
き、俺思いましたよ。これはどう考えても偶然じゃない。白河さん  
が意図的に仕組んだものだろう。白河さんの目的は、やっぱりあの  
お店にあったんだってね」

綾の心臓ははちきれんばかりに血液を全身に廻らせている。

「そして考えました。どうして白河さんはそこまでクマのぬいぐる  
みにこだわるのか。いえ、もっと正確に言つと、どうしてクマにこ  
だわっているのか。その理由をですね、俺はこう推測します。いう  
ならばあなたと高梨さんは、俺と夏美のような関係にあったのでは  
ないかと」

そのとき、夏美がガタつと椅子を動かした。

「なっ……！ こ、恋人関係ってことですか！？」

「違う！ 一方的な好意ってことだ！」

後輩の高揚感を小守が罵倒し木っ端みじんに破壊した。

「つ、つまりあなたは、ウルスのボーカル、ヨシキさんの熱狂的なファンだったんです」

どくんどくと、動悸が激しい。綾はもう口を効くことができない。

「あなたは、ウルスのボーカルである、ヨシキさんに密かに想いを寄せて追いかけていたんです。経緯は不明ですが、あなたはヨシキさんのおじいさんの家、つまり、クマのぬいぐるみを商売道具としている名もなき店を突きとめた。でも自分は学業や習い事で忙しい身。会いに行こうかどうか悩んだ末、俺たちに頼みこむことを思いついたんです」

まるで脳内にあるデータを解析されているような感覚を、綾はひしひしと覚えた。

「すいません先輩。さっきから言ってるんですけど、どうしてわざわざ嘘でカムフラージュする必要があったんですか？ それにこの女は、二週間くらい前から自分自身で習い事を休んでますよね？それが親へのちょっとした復讐心だとしても、その時点で『忙しい身』ではなくなります。今の先輩の説明だと、全然納得できないんですけど？」

夏美の指摘が鋭い。この女のことならばなんでも知ってるといった言動だ。

「俺も、話の肝の部分は曖昧にしか掴めていない。だからせっかくだし、白河さんから直接聞こうかと思つてな。おそらくは、『主観と客観』の問題じゃないかと」

一度小さく深呼吸をした綾は、すっと顔を上げて小守の顔を瞳に映した。

私は間違っていたのだろう。この部室に住みついている人間、白河高校三年、学年一位のこの人を、初めから敵視する必要なんてなかったんだ。公言してほしくないことをきちんとわきまえて、私に判断をゆだねてくれた。こんな生真面目な人を警戒する理由はどこにある？ 誰がこの人を悪く言える？ 最近の評判はガタ落ちで、

ただ盲目的で暗いやつだつて噂されてたりもしたけど、なんてこと  
ない普通の人間だったんだ。ただ少し、まわりよりも頭脳明晰で、  
それでももって知的で、何気なく深読みできて、なおかつ他人への配  
慮を忘れない。そんなまともな人間だったんだ。

白状しよう。ちゃんと自分の言いたいことを言おう。

ようやく気が楽になった綾は、煮詰まった心中を口にした。

「あとは、私が話してもいいですか？」

突然の開口ものともせず、小守は優しい表情を崩さずにたった一  
度だけうなずいた。

## 彼女の過去 その1

有り余るほどの財産、人並み以上の美貌、過不足ない謙虚さ。

白河綾のまわりには、常に幸せの種が詰まっていた。

父がとある企業の社長を務めていて、その業績に不安を呈する者はいない。テレビコマーシャルや新聞の広告、インターネット事業をも確立し、やる気になればこの世の中を左右できるほどの権力と財産を併せ持っていた。つまり綾は、どんなに躓いても倒れないような、絶対的な将来を約束された恵まれしお嬢様なのだ。

そんな父の口癖はこうだった。

「なにか一つでいい、自分の好きなことを見つけてなさい。将来わたしの会社に入れとは言わないさ。しかし、折角の長き人生、怠惰な生活を送ってはいけないぞ？ 色々なことを勉強なさい。それがどんなに嫌いなことでも構わない。必ず綾のためになる。必ずその中の一つに綾が好きなことがある。下手な鉄砲数打ちや当たるといからな。ん？ この意味がわからないなら自分で調べてみなさい。それがいつか、綾の将来に繋がっていくから」

辞書すら引くことすらできない幼い頃からずっと、こんな調子で言い聞かせられた。その父の近くで、母がくすくすと笑っていたのを覚えている。

「綾をどんな娘に育てる気？」

平和な家庭が、ずっと綾の傍にあった。それは高校生になった今でも消えたとは思っていない。でもその幸せは、裏を返してみれば、習い事に縛られる生活を送れと言われているようなものだったのだ。綾がまだ中学に入りたてだったときの話だ。

普通に家の力ギを開け、普通に靴を脱いで玄関に上がった。きちんと靴をそろえて、廊下を歩き始めると、いきなりリビングの扉が開いた。

「綾！ 今日は英会話の塾があるはずでしょう！ どうして帰って

来たの！」

学校から帰ってくるなり母に甲高い声で面責されて、綾は小さな声で答えた。

「予定がずれたって言ったでしょ？」

「いつ？ いつの話よ？」

「先週よ。英会話の塾は金曜日から土曜日に移ったって、ちゃんと話したよね？」

母は娘に疑いの目を向けた。

「覚えてないわ。本当に言ったの？」

「言ったじゃない。お母さん、なんか最近物覚えがわるいよね？」

親を心配して言ったつもりだったのに、母はそう捉えなかった。

「な、なんてこと言うの！ 親にケチつけるもんじゃありません！バシッ！」

綾は平手打ちを食らった。顔が強制的に弾かれ、頬が赤くはれ上がった。

「次にまた口ごたえしたら、あいた今日の時間にテニススクールでも入れてあげるからね」

「そ、そんなこ……」

口ごたえするとまずいと思い、綾はそこで言葉を区切った。もう何度も苦い経験をしている。

もともと、週に二回だけ習い事があって、休日以外はのんびりできたものなのだ。なのにいつの間にか母は習い事を増やし始め、今の綾は、スケジュール表に記入できないほどの忙しさになっていた。休みなんて、今日くらいしかなかったのに。母はそれをも奪おうとしていた。

父はほとんど家に帰って来ない。家事と育児は母にまかせっきりだ。その責任感が、私を厳しくしつけようとするのかもしれない。正確なところは、わからないけど。

もうこのままだと変になってしまふ。きれいな衣服やおいしい食事があって、快適な生活を送れるはずなのに、なによ、全然楽しく

ないじゃない。習い事の中に好きなものも見いだせないし、いくら成績を上げてても生きている心地なんてしない。そう感じた綾は、階段を駆け上がって二階の部屋に飛び込んだ。机の引き出しから、昔、何度か隙を見て親から掠め取った十万円を取り出し、家出をする決意をした。

土曜日だ。午前授業でクラスが解散すると、綾はいつものように多忙を装って教室を飛び出した。教室の中から友達が「英語塾、頑張って来いよー！」と声を飛ばしてきたので、大きな声で返事をしようと思った。でもごめんね、今日から私は家を出るの。悪魔のような母が住んでいるあの家から、私自身の力で抜け出すの。あいちゃん、今日でもう会えなくなるかもしれないから、こう言うっておくね。

「さようなら！」

その声があいちゃんに届いたかどうかは不明だ。でも綾は、一心不乱に学校内を走り抜け、誰も知らない土地へと、足を延ばした。



## 彼女の過去 その2

無作為に電車を乗り継いでいき、綾がたどり着いたのは、商店街のようにずらりと店が立ち並ぶネオン街だった。中学生がきていい場所じゃないと知っていたが、自分らしくない場所が一番見つかりづらいだろうと思い、こんなところに来てしまった。

赤、青、黄、緑、赤、黄、赤、青

一つ一つの看板の色を見ていくだけでもなんだか楽しい。道をゆく人は大抵大人で、しかも中年層がほとんどだ。中学生の綾には目もくれず、よろよるになるまで飲んで、酔っ払いながら道を歩いている。間違っても肌が触れなくなかったので、綾は左右にちょこまかとよけながら、街を進んでいった。

明るかったある店の入り口をバックにして立ち止り、綾は腕時計に目をやった。時間はもう九時を過ぎている。ちょうど英語塾が終了した時刻だ。もしかしたら今、塾からの連絡を受けて、お母さんが慌ててお父さんに電話してるのかもな。いや、そんなことないか。英語塾が、たった一回休んだ生徒の心配なんて、するはずないもんね。かなり大規模な英語塾だし、一人一人に構っている暇なんて、きつとないんだろう。

綾はこのネオン街を見渡して考えていた。とにかく今日は、どこかに泊まらなければならない。十万円もあれば一ヶ月くらいは過ごせるんじゃないかな。家族でグアム旅行をしたときは、一泊で何十万円もした気がするけど、ここはグアムじゃなくて日本だ。どの建物もグアムのスイートとは違って狭そうだし汚なそうだから、一泊千円くらいで済むだろう。綾は今一度、財布の中身を確認しようと鞆のチャックを開けた。

「いたっ！」

そのとき、後ろから誰かに衝突されて、綾は地面に倒れ込んだ。地面に落ちた鞆から中身が散乱して、道行く人たちに何度も踏まれ

た。

「あつ、ちよつと！」

綾を助けようとする人はいなかった。真っ先に財布を拾った綾は、後ろを振り向いてみた。

「ういゝ、ごめんねおじょーちゃん！ んんっ？ おじょうちゃん？ こんなところに小さなおじょうちゃん？ あれ、もしかして僕に惚れちゃった？ そのお金つて、僕とホテルに泊まるためにっ…… あるんでしょ！」

店内から出てきたお客さんらしき太った中年男性が、綾を舐めるようにして見ていた。恰好からしてサラリーマンらしいが、お腹がぽっこりと出ていて、胸元のシャツが汗を吸い取って少し濡れている。それに顔が真っ赤でなんだか危なそうだ。彼女は慌てて、財布をスカートのポケットに滑り込ませた。

「おろろ？ お財布が消えちゃったあゝ。えへへ、そこにあるのはわかってるよーん」

ふらつきながら、中年男性は綾のスカートを指さした。そして、ゆっくりと綾に近づいていく。怖くなった綾はとっさに後ずさったが、落ちていた自分の鞆に踵をつつかえて、尻もちをついた。

「さあああ、さあああ！」

「や、やめてっ……！」

恐怖で足がすくみ、思うように動かない。目をつぶって最悪の事態を覚悟したその瞬間、誰かが助け船を出してくれた。

「おらあ！ なにやってんだクソ部長！」

店内から出てきた誰かが、その中年男性のわき腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。

「てめえ、こんな若いもんに手え出したら即刻、この店出入り禁止にすんぞ！」

そう吐き捨てて店内から出てきたのは、けばけばしい女性だった。金髪の痛んだ髪に、厚化粧で別人に変貌したような顔。紫のアイラインを使って目を大きく見せている。キャミソールのような、男性

を翻弄する薄いピンクの服を着用していた。すらつとしたボディラインで、まだ歳も十代か二十代の境くらいだろうか。化粧のわりには、若く見える女性だった。

「おい、わかつてんのか、のんだくれクソ部長!？」

「あははは、マリア様! 仰せのままにっ!」

中年男性はネクタイを掴まれて少し息苦しそうだった。

「嬉しそうな顔すんじゃないよ!」

男性はもう一度わき腹を蹴られて、ふらふらと逃げるように立ち去った。

「つたく、てめえもてめえだ!」

「えっ?」

「なにが楽しくてこんな大人の街に来やがったんだ? さつさと帰れ!」

いきなり怒りの矛先を向けられて、綾は目を丸くしていた。

「店の名前が読めねえのか?」

綾は鞆の中身を片づけるのも忘れて店名を見上げた。筆記体のネオンサインで、『Butterfly』と書かれていた。

「蝶々って意味だ。つまり夜の蝶。ここはキャバクラだ。こんなところに来るんじゃないよクソガキが! 駅はあっちだ。さつさと帰んな!」

キャバ嬢はそう畳みかけて、綾を追い返そうとした。

「あの、ちょっと聞きたいんですけど」

「なんだ?」

「ここら辺にホテルはありませんか?」

店内に戻ろうとしたキャバ嬢が、ふと足をとめて振り返った。

「今、なんつった?」

「泊まる場所を探してるんです。ここらへんお詳しいですよ? 教えてくれませんか?」

すがりつくなら今しかない。そう思った綾は、失敗を覚悟で質問した。

「それを聞いて、てめえどうする気だ？」

「へ？ あ、一泊します」

「本当に一泊だけなのか？」

「え、ま、まあ」

「こんな夜遅くにネオン街に来てホテルを探してるなんて、家出としか思えねえよな？」

キャバ嬢が綾を睨みつけた。

「いや別に、そんなんじゃないです」

「ほう」

歩道に散らばった鞆の中身から、キャバ嬢はある一枚の定期入れを拾い上げた。

「白河綾か。年齢さえなんとかなればここで働けたかもしれねえな。いいツラしてるよ、お前」

褒められても特に嬉しくなかった。それより、今欲しいのは宿泊先の情報だ。

「どこでもいいんです！ 千円くらいで泊まれるんですよね？ 教えて下さい！」

「お前、世の中なめてんのか？ 千円でホテルに泊まれるわけねえだろ」

「じゃあ、五千円くらいですか？」

「それくらいのところはあるけどな、ここら辺一帯なら、一万は下らねえはずだ」

「え、うそっ！」

瞬時に計算した。じゃあ持ち金十万円では、十日間しか泊まれな  
いじゃない！

「いいから家に帰れ。親に心配かけんな」

店の階段を下りていくキャバ嬢の背中に、綾が叫んだ。

「あんな家に、帰りたくないです！」

口をついて出たのは綾の本心だった。

「もつうんざりなの！ 習い事習い事ばかりで私を締め付けて、な

にが将来のためよ！ 押しつぶされそうな私の気も知らないで、なにがしつけよ！」

鬱屈した綾の気持ちが爆発した。

「私気付いたの。いくらお金があつたって、それを使える時間がなければ楽しくもなんともない。ずっと勉強してるだけで遊ぶ時間がないなんて、もう、こりごりなの……」

綾の瞳には涙が溜まり、頬を伝ってその雫がこぼれ落ちた。

それに気づいたキャバ嬢は綾をしばらく見つめてから言った。

「なんなら一度、思いっきり遊んでみるか？」

「え？」

「偉そうに勉強と遊びを秤にかけてるみたいだけどな、お前は思いっきり遊んだことがあるのか？ 話を聞く限り、部屋にこ閉じ籠って勉強しかしてないようだぞ？」

その指摘は正しかった。外には頻繁に出るが、それは習い事の手帰りつてだけのことだ。友達と遊んだ経験など、綾にとっては乏しいもので。

「でも、家には……」

はあ、とため息をついたキャバ嬢は、歩道まで出てしゃがみ込み、いまだ散らばっていたノートや教科書を拾い上げて、綾の鞆に仕舞った。

「白河綾。一日だけなら付き合つてやるよ」

キャバ嬢は、綾に鞆を手渡して続けた。「あたしと思いつきり、遊んでみないか？」

唐突な展開に、綾は気が動転していた。

「えっ、あ、あの」

「あたしと思いつきり遊んでみて、それでもまだ満足しないなら好きなどこ行つちまえ。もちろん普通の遊びだぞ。水商売とかは抜きでな」

返答に困って、綾は委縮していた。

「あたし、今日はこれであがりなんだ。これから着替えてくるから、

もしあたしと遊んでみたかったらここで待ってる。クソ喰らえと思  
ったなら、ホテルでもなんでも自分で探して消えちまいな」

そこまで一気に言い終えて、キャバ嬢は店内に戻って行った。

カバンの取っ手を強く握りしめた綾は、地面を睨みつけるように  
しながら、その場から動かなかった。

### 彼女の過去 その3

そもそも、『遊ぶ』ってどういうことなんだろう。帰宅ラッシュもなくなつて、夜も遅い電車で揺られながら、綾はキャバ嬢に訊いてみた。

「楽しいって自分が思えば、それどんなことであろうと遊んでるってことだろ。少なくともお前は今までの人生で、楽しいって心から思える出来事がなかったんだろ？」

向かいに見える窓の景色が横に流されていく。ネオン街からすっかり離れた駅で二人は下車した。どこに行くのか教えてくれないので頻りに問いただしたが、キャバ嬢は無言だった。

「あのなあ、キャバ嬢キャバ嬢って呼ぶのやめてくれねえか？ 恥ずかしいんだよ。あたしにはな、九条マリアつつうちゃんとした名前があるんだからな」

九条はそう言つて駅からどんどん離れていった。綾は、その本名は似合わないなあと思ひながら付いていった。十分ほど歩いていくと、何十階もある大きなマンションが見えてきた。綾は建物を見上げながら、もしかと思つて九条に問いかけた。

「ここ、ご自宅ですか？」

「ああそうだよ。賃貸だけだな」

オートロック式で、パスワードを入力しないと入れない頑丈な自動ドアで隔たれていた。

「あ、あの、私はホテルに……」

「中学生が、それも一人で、どんなホテルに泊まろうとしても補導されるのが落ちだぞ。家出するならウチを使え。気に入らなければさっさと帰れ」

ピー、と音がして自動ドアが開いた。九条はさっさとその間を潜り抜けてエレベーターの前で階数ボタンを押していた。

ここで引き返したら、補導されてしまう

そんな恐怖にかられた綾は、閉じかかった自動ドアに足を挟み込み、こじ開けるようにしてオートロックのマンションに侵入した。

九条の部屋は一人暮らしにしては広かったが、所狭しとゴミが置かれていて、その機能を十分に発揮できていない。綾は幼いころに見た、片づけられない女特集のテレビ番組を思い出していた。キッチン周辺にはゴミ袋が散乱、シンクの中には面倒くさくて洗っていない食器類、テーブルの上にはビールの空き缶がいくつも転がっていた気がする。九条の部屋はそこまで酷いありさまじゃあなかったが、見る限り、リビングのテーブルにはビールの空き缶が所狭しと乗せられていた。

「あー、かつたるい。いくら稼ぎよくてもまともな客いねえ」

だるそうに言った九条がショルダーバックを下ろし、いきなり着衣を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちよつと脱がないでくださいよ！」

「あ？ お前男か？」

そう言っでどんどん脱いでいく。そして下着姿になった九条はパジャマに着替えるかと思いきや、「風呂」と呟いて廊下に消えていった。

「あーおい、お前さ、テーブルの上にあるビールとか片付けとけよ？ 泊めてやってんだから文句はなしだぞ。あ、そうだ。ついでに掃除機使ってリビング掃除しとけよ！」

廊下の向こうからいろんな声が聞こえてきた。断る術を持たなかった綾は、テーブルの上にあるビールの空き缶を掴み取った。うわ、こぼしたりしているみたいでベトベトする。取りあえず、一つの袋にでもまとめようか。ゴミ袋の置き場所を訊こうと思い、リビングから出て洗面所の扉をスライドさせた瞬間だった。

「あーおい、食器も洗い忘れてたから洗っとけよ！」

大声で追加注文をされてしまい、綾は肩を落としていた。



食器類をすべて洗い終わり、ビールの空き缶を潰して透明なポリ袋に入れて玄関に置いておいた。掃除機は音が大きいからやめといった方がいいんじゃないかと後回しにしてたけど、最近の掃除機は進化しているらしい。かなり音が小さい。エアコンをかけたほうがうるさいかもしれない。綾は、リビングを掃除しながら、ふと、ラックの上に置かれていた電話機に目を奪われた。

留守電ボタンが押されていて、赤く点滅していた。家政婦でもないのに重労働を強いられてへとへとだった綾は、小さな悪戯を思いついた。

（メッセージ消しといてやる！）

こっちだってお風呂入りたいのに一人だけいい気持ちになるなんてと、綾は悔しがった。家出したからこんなことになったのだが、そんなことは棚に上げて、九条に少し仕返ししてやろうと思った。

リビングの扉を開いて、お風呂場の音に耳を傾けた。なにやら歌っているらしく、声が聞こえてきた。その歌は結構有名な曲だったので、綾も歌詞は知っていた。まだ一番のサビにも達していないから出てこないだろう。急いでリビングの扉を閉め、綾は電話機の前に戻った。

点滅する赤いボタンを押すと、音声 flowed。

『メッセージは、一件、です』

ピー、と音がした。

よし、と思つてから、『時刻は、午後、十時十二分、です』ととぎれとぎれの電子音が流れ、最後に記録されていたメッセージが聞こえてきた。

『マリア？　こんな遅くまでお疲れ様、お母さんです。あのね、今更だけどね、ちょっと言いたくなつたの。大学まで辞めて働いてくれて、本当にありがとう。あなたすぐに怒ったりしちゃうから、私怖くて言い出せなくて。でもわかつてるわよ。あなた、本当はとっても優しい女の子だもんね。可哀想な人がいると放っておけない性格、お母さん、ちゃんとわかつてますから。あ、それと、仕送りあ

りがとうね。でもこんなにお金送ってくれなくてもいいのよ？ さんの仕事してるのか知らないけど、ちゃんと生活しているなら私はそれでいいです。少しだけ欲を言うとね、そろそろ彼氏の一人くらは作りなさい。二十代だから大丈夫って油断していると、あとで後悔するわよ？ えっとじゃあ、気が向いたら連絡ください。待ってます」

そこで留守電が切れた。すると音声で、留守電を消すかどうか訊いてきた。

メッセージを聞きながら、綾は反省していた。口が悪くてけばけばしい女性だったけど、ちゃんと親のことを思ってたんだ。キャバ嬢ってことまで隠して働いて、親にお金を送る余裕まで持っている。私とは違う。あの人は大人なんだ。決して道に迷ったりしない大人なんだ。

「あつちいな。お、なんかすっげえきれいになっくんじゃねえか！」

綾はとっさにボタンを押した。あ、間違えて消去ボタン押しちゃった！

「んでお前、なにやってんだ？」

九条のすっぱんは案外きれいだった。キャバクラで働くために、わざと化粧してるのかもしれない。少し幼くは見えるけど、こっちのほうにすぐに彼氏ができそうだ。

バスタオルを腹巻のようにして寄ってきた九条が、綾の後ろを覗き込んだ。

「ははん。留守電いじってたのか。でもいつものことだ。消そうとしたってなにも入ってねえよ」

九条は手をのばして留守電を切った。それから、ソファに横たわって言った。

「掃除はもういい。お前も風呂入ってからさっさと寝ろ。なにか食いたきゃ勝手に冷蔵庫漁ればいい。あたしはしばらくしたら隣の部屋で寝るからな」

時刻はもう夜の十一時を過ぎている。

綾はちらつと後ろを振り返り、気づかれぬように電話機を見つめていた。

## 彼女の過去 その4

翌日の朝九時に綾は起こされた。リビングのソファで一夜を過ごした彼女は、この部屋にいる理由をしばしば忘れていたが、起こしてくれたすっぴんの女性を目にした途端、すべての記憶をよみがえらせた。

「まさか制服のまま寝るとはな。着替えは勝手に使えって、ああ、言ってなかったな」

それから二人は朝食をとった。パンと野菜の盛り合わせというシンプルな食事を振る舞われて、綾は、ぼけっとしながら口に運んでいた。テレビが付いていたのでぼんやりと見ていたが、大企業社長の娘が失踪したというニュースは流れてこなかった。

「じゃあそろそろ、遊びに行くか！」

身支度を終えて、九条は薄着になった。綾も歯ブラシやらなんやらを借りて支度し、玄関に走って行った。着ている服は、やっぱり制服だった。

「お化粧はいいんですか？」

「今日はしねえよ。休みだし」

「じゃあ、どこいくんですか？」

そう尋ねると、九条は「そうだなあ」といって、天井を見つめた。「あたしが常に遊びだと思っていることを片っ端からやってみるか！」

二人は、春の日差し存分に落ちてくる気持ちのいい空間を通って、マンションから駅へと向かった。

まるで子供のような九条は、なんでもかんでも遊びと思っている人間らしい。

シヨップピングや映画鑑賞、ボウリングに漫画喫茶、ほかにも大道芸人にお金を投げたり、公園で迷子になっていた女の子を保護して親を探したりと、連れ回された綾は大忙しだった。楽しい時間とい

うよりも、苦しくて仕方のない時間がぐるぐると廻っていく。二時になり三時になり、そして四時に五時に　めまぐるしく時計の針が回転している。一応、綾はごく普通の中学生だし、通学で普段から足を使っではいるものの、一万歩以上も歩くとなるとさすがに足が悲鳴を上げて、ふくらはぎが痛くなってきた。

「だらしねえ奴だな。遊ぶ体力すらねえってか？」

そう言いながら、九条は少し笑っていた。怒られてると思ったのに、九条は笑った。

「おっと、もう六時か。そろそろメインイベントと行くか！」

両手に持った大荷物を手にして、九条は駅方面に歩き出した。

「どこいくんですか？」

「あたしが今、いっちゃん楽しいと思える場所に連れてってやるよ」  
シヨッピングを切り上げて九条は人込みをもものともせずに進んでいく。なぜか綾も服を買ってもらっていたので、両手は袋で塞がっていた。そんな綾は、いろいろな人にぶつかりながら九条のあとに続いていく。ろくでもないところに連れて行かれる予感がしたが、反面、少しの期待を胸にして、いささか妙なキャバ嬢の背中を追った。

連れてこられた場所は、あのネオン街のはずれだった。

満月が夜空に浮かび、また大人たちの時間がやってくる。二人は、すべての荷物を駅のコインロッカーに預けた。てつきり、ネオン街のどこかに行く予想していた綾だったが、九条は駅を降りた途端にネオン街とは逆方向に足を運んでいた。ようやくその隣に追いついて並んで歩き出した綾は、ふと九条に尋ねた。

「どこに連れてってくれるんですか？」

「お前は運がいいぞ。未来のスターに会えるんだからな」

それ以上のことは教えてくれなかった。この人はなんだか、私を連れ回すことを楽しんでいる気がする。だから、再度答えを乞うような真似はしないことにした。

ある場所に、九条がするつと入っていった。突然方向転換されて慌てた綾は、店名を見ずにその建物に駆けこんだ。

「いらっしやいませ。チケットはお持ちですか？」

「いや、ない。でもあいてるだろ？　ここで払う。二人分だ」

駅の小さな待合室のようなロビーだった。綾はわけもわからず二人のやり取りを見ながら、そんな感想を抱いた。

「開演はもうすぐ、七時からとなります。お楽しみください」

受付の人がそう言って、九条と綾に頭を下げた。

それから九条がロビーの奥にある細い階段を上っていったので、綾は取りあえずついていくことにした。

九条が映画館にあるような重い扉をゆっくり引いていくと、そこにはがらんとした空間があった。薄暗く、ほとんど電気がついていないので室内がよく見えない。

「なんですか、ここ？」

その質問に、九条は前方を指さして答えた。

九条が指さす先には数段の階段があつて、その上に小さなステージがあつた。幕がもう開いているのでステージ上が窺える。ドラムやキーボード、それにマイクスタンドやギターが鎮座していた。それを見て、さすがの綾も気づいた。

「ここって、ライブハウスですか？」

九条がうなずいた。

「もうすぐ始まるぞ、スタンディングのライブだから、イスはねえんだ」

彼女は一人、ステージの前を陣取って開演を待っていた。

「ちょっと待ってください、もうすぐ七時じゃないですか。ライブつてもこれは」

すると突然、ステージの袖から大きなギターの音が響いた。九条は、「待ってましたあ！」と精一杯の拍手を送る。

どうということなんだろう。ここにいるのは九条と私だけだ。たった二人のためにライブを行うというのか。どうせ質問しても答えて

くれないんだろ」と、綾は諦めて、はしゃぐ九条の隣で立ち止まった。

そして、ミラーボールで反射させているかのような、カラフルな光が天井から落ちてきた。

## 彼女の過去 その5

「みなさん初めまして！ ウルスの初ライブにおっ……」

ギターをぶら下げ、マイクを持ってステージ上に飛び出してきたのは、綾がテレビで見たこともない一人の男性だった。長身で金髪で、なによりキラキラとした服装が目立つ。これはもしか、ビジュアル系というジャンルの人間だろうか。それにしても、言葉遣いがやたら一般人臭くて、ビジュアル系を好む人間には相手にされないようにも思える。

「よっ！ ヨシキ来てやったぞ！」

「あっ、マリア……」

そんなやり取りの中、ステージの袖からまた二人出てきた。ギターを手にしているのが一人、ドラムの席に座ったのが一人。計三人のバンドだった。九条いわく、この三人は高校時代の仲間らしい。三人共、音楽の道に進もうとしているのだという。

「その、隣の人は？」

「ん、ああ、近所の知り合いでさ。せっかくだから連れて来てやったんだよ。最近、バンドつてのに興味があるんだってよ」

「そ、そう」

マイクをスタンドにセットするも、それを力なく持ち、下を向くヨシキ。

「おいなにやってんだ。さっさと演奏しろよ」

「……」

嫌な空気が漂っていた。ステージ上にいる三人のビジュアル系バンドは全員、生気を失くしたようにして俯いている。

「あ、あの、九条さん」

「んだよ綾！ 邪魔すんな！」

「観客が二人だけじゃ、そりゃ演奏する気もなくなりますよ」

「んなことはわかってる！ おいヨシキ！」



呼ばれたことに気付き、スタンドマイクから手を離したヨシキが九条を見た。

「お前があたしを呼んだんだろ？ 金も払ってんだからさっさと演奏しろよ！」

異常なまでに声を散らす九条。ライブハウスなので反響音が半端じゃない。その隣にいる綾は怖気づいて声を出せない。

「せっかくここまでやってきたんだろ！ 久しぶりに連絡くれたと思っただけなんだこのザマは！ さっさと音楽プロデューサーにめえつけられて、アーティストとしてやっていくのがお前の夢なんじゃねえのかよ！」

その通りらしく、ヨシキは言葉も出ないようで、暗い顔になっていた。

「でもこれだけ頑張って、初ライブはたった二人。しかもその一人は昔の知り合い。何年もやって来たのにこんなじゃ、僕らはもうダメだよ」

奥の二人も微かにうなずいていた。

「ふざけんな！ あたしが今日をどれだけ楽しみにしてたかお前、わかってんのか！？」

「えっ」

ヨシキはまた、九条に視線をやった。

「お前らのファン一号はあたしだって、昔言っただけだよ！ なにがあってもあたしだけは応援してやるって、じゃあ僕は絶対に夢を叶えるからって、約束しただよ！ ファンを大事にするのが僕らのモットーなんだって、お前が昔、散々言っただけじゃねえかよ！」

カッと目を見開いてヨシキがそれに反論する。

「ぼ、僕らだって頑張ったんだ！ その結果がマリアの言う通りこのザマだ！ こんなじゃ音楽やっていけないって最近、気づいたんだよ！ もしこの初ライブで満足のいく人数を得られなかったらもう解散しようって、三人で約束したんだよ！」

こんな居心地の悪いライブハウスは初めてだった。いや、綾はコンサートに参加したことがないのでわからなかったが、ともかく、ライブハウスで喧嘩が始まるなんてことが、尋常じゃない出来事だってことくらいは認知できた。

「あたしとの約束は、破るってのか？」

「すまないと思ってる。せめてじゃあ、一曲くらい聞いて」

「ふざけんな！」

九条が唾を飛ばす。

「そんなの、あたしが認めると思うか？ お前らがよくてもこっちは願い下げだ！」

言って、九条の意識は突如として綾に移った。

「おい、綾」

「な、なんですか？」

「こいつらの音楽を、一曲だけ聞いてつてくれねえか？」

「構いませんけど、でも」

「野暮は承知だ。あたしはそうやって生きてきた。でもこいつらには、ちゃんとした才能があると思うんだ。音楽をやって一世を風靡するような才能がな」

九条は、綾にもう一つお願いをした。

「こいつらの演奏を一曲聞いて、いいと思ったらここに残ってくれ。悪いと思つたなら、もうこのまま自分の家に帰れ」

「えっ、そんなっ！」

「あたしたちがいくら文句を言いあつても結局は仲間内だ。正確な判断なんかできやしない。だから第三者のお前が判断しろ。こいつらは音楽の才能を持っているのか。それともただの下だらねえお遊びバンドなのか、お前が決めてくれ」

「でも私、音楽プロデューサーでもなんでもないですし……」

「あたしだってそうだ。でも音楽の良さを決めるのはプロデューサーじゃない、観客だ。お前の感性でいい。良いか悪いか決めてくれ。ただし、遠慮なんかしたらぶつとばすからな」

九条の顔は本気を表現していた。これを断つたら、ここにいる四人はもつと仲が悪くなる。そんな真似が綾にできるはずもなく、

「わ、わかりました。じゃあ一曲だけでも」

彼女は思い切って承諾した。

「おいヨシキ、わかったか？」

「ああ、わかった」それからヨシキは綾に言った。「本当に、無理しなくていいから」

三人は定位置につき、お互いに顔を見合わせてうなずいた。

音楽を聞くことが少ない綾は正直焦っていた。良いか悪いかの判断はどこで決めればいいのか。そもそも良いってなに？ 悪いってなに？ なにをどう考慮してどのように結果を出せばいいの？ わからない、わからない。勉強なんかよりもずっと難しい。設問の意図はわかっても、解答欄は空欄のままだ。どうしよう、どうしよう。人知れず綾が葛藤していたそのとき、ドラムの人が棒で合図を始め、イントロがスタートした。

「曲名は、レインス」

ヨシキが一言呟いたあと歌詞パートに突入した。

思い描いていたイメージとは、遥かにかけ離れていた。ビジュアル系バンドって見た目だけのバンドじゃあなかったんだ。音楽についてはよくわからないけど、さっきまでの三人とは違う、熱気をまとった曲目。勇気をくれるような躍動感あふれる曲調にパフォーマンス。必死にドラムをたたき倒したり、それにギターの旋律が新鮮だ。なにより、ボーカルのヨシキは、花形であるギターの人よりも、より一層目立っていた。

「果てない夢へと進む。雨の中を駆ける俺たちが」

歌詞と激動する曲がマッチする。なによりヨシキの声が優しくてきれいで、心を洗ってくれるようだった。綾は口を開いたまま曲を聞き続けていた。次第に体が揺れ始めて、自然にサビだけは口ずさんでしまう。観客をも巻き込んでくれる、熱い曲と悲しい歌詞が上手く混ざり合って、絶妙なハーモニーを奏でていた。

そして最後にはサビが三連続し、三人は声を揃えて言い放った。

『レインズ!』

綾の耳元に残るのは、反響音が作る余韻。それはたった一言で表現できた。

(楽しい)

勉強ばかりしてきて、なにが楽しいのかなんてこと、自分には全然わからなかったけど、綾はこのとき、はつきりと、くつきりと感じた。

きつとこれが、私にとって『遊ぶ』ってことに値するんだ。今までやってきたすべてのことが頭から離れて、今の数分間だけはこの曲、この場の空気だけに馴染めた気がする。どこか異国の地に足を踏み入れたような、完全に今までとは違う熱い自分を体験していた。「ど、どうだったかな?」

ボーカルのヨシキは、息を切らしながら訊いた。

それに応えるのが綾の役目だ。

「すぐく、いいと思いました」

淡々とそう言ってさらに、

「すぐくすぐく、カッコよかったです」

付け加えた。

綾の本心だった。本音だった。

「じゃあお前、今日からウルスのファンになれ」

「えっ?」

九条が真っ先にそう命令した。「好きだったら、ファンになれるよな?」

「はい! ほかの曲も聞いてみたいんですが、ダメでしょうか?」

ステージ上の三人は、驚いた顔をして顔を見合わせた。それからすぐに、客席にいる二人に向かって、こう言った。

「じゃあ、お言葉に甘えてもう一曲やります!」

「だからヨシキ! もっとビジュアル系らしい言葉遣いしろっての! そんなんじゃ頂点目指せねえぞ!」

ヨシキは少し怪訝な表情をしてから、それを打ち消す笑顔を作り、「おいてめえら！俺らと一緒にハジけねえか！？」らしく口調を変貌させて、たった二人のためのライブが続行された。

激しさを増す会場内で綾は思った。

（きつとこの人は、九条さんは、ヨシキさんのこと）

自ら首を振って考えを振りはらう綾。

（私だって！）

綾はステージに向かって声を飛ばす。

隣にいる九条に決して負けないように、腹の底から、一生懸命に声を飛ばした。

## 告白、喪失への道

「私はそのライブが終わったあと、喜んで家に帰りました。お母さんがきつくしつけてくれて、私が思わず家出したからこそ、ウルスというバンドに出会えた。母さんにはすごく怒られましたけど、それだけ心配してくれてたってことだと思ったんです。まあ、お金を盗んだことを白状したのが一つの原因だと思いますけど」

綾は神妙な顔をして、記憶している過去を二人に話した。

「それからすぐに、ウルスの人気に火が付きました。ライブ会場は、ライブハウスから大型コンサート会場へと移されて、私はほとんど、ヨシキさんから離されていきました。単なる一ファンとして、ほかのファンたちと一緒に声援を送ることしかできない人間になってしまった」

ごく自然に、小守が話の主導権を奪う。

「そして更にまた数年が経った。残念ながら、ウルスの人気は継続することなく、右肩下がりとなった。テレビでも取り上げられなくなって寂しがっていたあなたは、ふと、ヨシキさんのおじいさんが経営する、名もなき小さな店の存在を知った」

綾は、クマのぬいぐるみを抱きしめながらうなずいた。

「どのように知ったんですか？」

「ネットサーフィンです。ウルス公認のファンサイトの掲示板に情報が載ったんです。でも嘘の情報なんてごまんとあるし、管理人さんにすぐ消されるしほとんど相手にされないんですけど、その中の一つに、ヨシキさんのおじいちゃんが住んでいるクマだらけの店が『羨望駅』にある、って情報があつたんです。少しでも可能性があるならと思います、自ら身を投げてでも探してみたくなくて、確かめに行こうとしたんです」

「しかし偶然にもほどがあるかと。通っているピアノ教室の近くだったんですよ？」

「いいえ。そのときに習い事を変えたんです。ピアノ教室に。それが、今から一年ほど前になります」

綾は記憶が甦えらせる。

「ならやはり、今おっしゃったファンサイトの管理人はあなたですね？」

「えっ？」

「ファンサイトに載った不可解な情報がすぐ消されるのならば、あなたが管理人でないと筋が通らないんですよ。つねにファンサイトを見ているわけじゃないでしょうか。それに、管理人のハンドルネームが『アス』なのも気になっていました」

「そ、そこまでわかっていたんですか？」

「相当なファンであると仮定すると、そうであっても不思議じゃないかなと。管理人のハンドルネーム『アス』は、あなた自身のイニシャルをそのまま読むと完成しますから」

しかし綾は、ひとつだけ訂正した。

「管理人は確かに私です。でも、そのファンサイトの原型を作ったのは中学生時代の友達なんです。人一倍コンピューターに詳しい人だったので頼みました。私にはサイトを作る予備知識がありませんでした」

携帯電話でも管理できるようにしてもらい暇さえあれば掲示板を見ていたと綾は続けた。

「趣味を口外したんですか？」

想定範囲ぎりぎりの経緯を知り、小守が興味を持った。

「仕方なかったんです。ウルス公認のファンサイトを作るためにはこういうのを先取りするのが一番だと思って。あいちゃん、っていう子なんですけど。唯一話した友達です」

口を挟む隙がどこにもない夏美は、瞼が落ち込み、眠りに世界に引き込まれそうになっている。

「しかし、それらが本当だとしても、一年前からおじいさんのお店に通っていたわけではないですよ？ あの店のおじいさんはどう

やら、最近来たあなたのことを『久しぶりの来客だ』と捉えていたようですし、あなたの、初めての来店と考えるのが自然だと思うのですが」

時が経つにつれ、綾はだんだんと素直になっていく。

「その通りです。私はどうしても、最後の一步が踏み出せなかったんです。結局、真偽は自分の目で確かめないといけないのに、それなのに私は、あの店を探し出して訪ねる勇気がなかったんです。そしてそうやっているうちに、私の学年は上がり、高校三年生になってしまった。いつの間にかピアノも上手くなって、コンクールに応募できるほどになってしまったんです」

何気なく自慢しやがって、と思い眠気が吹き飛んだ夏美だったが、口には出さず代りにひとつ、ナボーナを口の中に放り込んで噛みしめた。

「でもあなたは最近、ピアノ教室の帰りにおじいさんの店を探し出して訪ねましたよね？　なにか、訪ねるに値する引き金があったんじゃないですか？」

小守が水を向けるが綾は黙り込んだままだ。静寂を保つ室内に声を滑り込ませたのはやはり、鋭利な視線を綾へと送り続ける小守だった。

「その引き金はもしかして、最近発売された、このベストアルバムじゃないですか？」

「……！」

肯定しようか、否定しようか、悩む綾。

「ベストアルバムというのは大抵、十周年や十五周年などの記念品として、ファンに向けて発売されることが多いはずですよ。でも、失礼ながら、あまり人気のないバンドがベストアルバムを出す場合は、少し違う」

綾は否定することを諦めた。それ以前にきつともう、表情でバレていると悟った。

「はい。そういうこと、です」



部屋の隅で一人、首をかしげる夏美は、

「どういうことですか？」

食す手をとめて二人に問いかけた。

「集大成のアルバム。つまり、そのアーティストのすべてが詰まったCDだ。今までの軌跡をたった数枚に圧縮し、最後の力を振り絞って出すアルバムが、ウルスにとつてのベストアルバム」

「最後の力？」

夏美はまたナボーナをぱくりと啜えて、啞然としたように不動となった。

「むっ」

もう夏美も気づいていた。ただ、口にするのは避けた。

「わかったか？ ウルスはな、このベストアルバムを期に解散しようとしてるんだ」

綾は途端にしゅんとなった。本当ならば、こんなに深くは知られるべきではなかった。

「俺、ウルスの公式サイトも見たんですよ。するとどうやら、一ヶ月ほど前から活動してないようでした。そしてそこには『解散』ではなく、『無期限に活動を休止する』と書かれていましたね。でもそれは、事実上の解散と言う意味合いなのでしょう。おそらくあなたも、それに気づいた。直接的には休止報道が引き金と言つべきでしょうか。そしてようやく、あなたはおじいさんの店を訪ねる決心がついた」

会話の間について夏美が指摘する。

「でも先輩、一時期ブームとなったバンドが解散危機に陥ったとしたら、普通はメディアがこぞって取り上げると思っんです。だけど私、そんなニュース一度も見たことないですよ？」

「報道つてのは大きな事件を何度も流す癖があるだろ？ そういうのに重ね合わせて休止報道すれば、ほとんどの場合、大きく取り上げやしない。新聞の片隅くらいなら載るかもしれないけどな。ウルスにもちゃんとしたマネージャーがいるだろうし、休止報道を最小

限に抑えたんだろう。ファンもかなり減っていたはずだ。別に不自然な話じゃない」

言い終えた小守は、綾に向き直った。

「その決心が固まったのが、今から二週間ほど前だったんでしょ。ピアノ教室の帰り、初めておじいさんの店に行ったとき、あなたは運よく高梨さんと再会した」

綾は大きくうなずいた。

「運命だと思いました。すっぴんは見たことなかったですし、見えるような格好になってましたけど、私には自信がありました。お店の中ですれ違った程度なので声は掛けられませんでした。それでも六年ほど前に聞いたあの声とあの表情。いくら化粧して隠れてたってわかります。だって私はずっと、あの人のことを追いかけてたんですから」

しゅんとして俯く綾。

小守はさえずるような小さな声で、そつと綾に語りかける。

「一度は偶然会えたとしても、二度目があるとは考えづらい。そこでああなたは考えた末にここへ来た。なんとか高梨さんと自分の関係がばれないように、ぬいぐるみ探しと偽り、依頼しにきた。なぜなら、ビジュアル系好む見た目ではないあなた自身が、ビジュアル系の核を担ったウルスという大型バンドを追いつめているなんて、誰にも知られたくなかったから。恥ずかしくて、言えなかったから。

これがあなたが自身が考えている『客観』です。『主観』とはかけ離れた客観的人物像が、あなた自身を翻弄していた」

彼の言っていることはすべて正しかった。綾は聞き流すこともできず、論理的に導き出された言葉を心にしみこませる。

「表向きの理由は単純に、『好きな人を追いかけている』なんですよ。真の理由は『ウルスのボーカルを追いかけている』になります。すべての習い事を休んだのには、親への反抗心と同時に、本当の依頼理由を隠す意味も含まれていた」

小さく笑いながら、小守は言った。

「あやうく騙されるところでした。あなたが習い事をサボっているのを知ったときはまだ、正直に言うと確証はなかったんです。高梨さんとヨシキさんが同一人物だというのも半信半疑の域を出ませんでしたからね。ただ単に、好きな人を追いかける健気な女の子、という可能性も考慮していました。でも、ここにやってきたあなたを問い詰めてみたら、答えは一点に収束しました。高梨さんはやはり、高梨ヨシキさんなんだとね」

## 消失、喪失への道

小守がふうと深呼吸した。すべてを暴露し終えた彼を見て、綾は椅子を引きずってまで立ち上がった。

「すいませんでした！ 本当に本当に、すいませんでした！」

綾は慣れない大声で叫び、必死になって頭を下げた。

「私っ、中途半端な人間なんです。実力はあるだろうって、まわりからはよく言われるんですけど、自分はそんなに自信持てなくて、最後の最後で踏みとどまってしまうんです。言わなきゃいけないことを最後まで引き延ばして、結局言えずに終わるんです。そんな小心者だから、こんな下らない細工までして依頼してしまっただと思えます。本当にごめんなさい！」

白河綾に弟はいるが、誕生日まではまだ何ヶ月もあった。家にある電話機の電話線は確かに引っこ抜いていたものの、それ以前に、習い事を休む旨を先生などに伝えて電話が来るのを未然に防いでいたという。ピアノの先生だけにはそれを伝えなかった理由は、表向きの依頼理由に気づかせるためだと、綾は小守に向かって明言した。一向に顔を上げずにいる綾に、小守が伝える。

「そっいう、恥じらいを持つ女の子らしい性格、俺は嫌いじゃないですよ」

夏美はその発言にむっとしたが、声は出さなかった。

「成績だつて、中学の頃からいつも学年二位で、もう少して一番になれるのに、私って本当に中途半端な人間ですよね……」

「え？」

涙ぐむ綾の思いがけないセリフに、小守の表情が曇った。

「へえー。つまり先輩がいつまでも学年一位に君臨し続けるからこそ、この女の悲しみは増幅されて、ついにはこんな嘘までついて依頼してしまったということなんです。へえへえ、そっいうことだったんですね。嫌なやつですね、小守先輩って！」

「なあああつつみいい！」

我慢ならなくなった小守は我を失い、机をバンとたたいて立ち上がった。

「横柄に勉強まで教えてほしいなんて言っただけのこと謝ります。ごめんなさい」

「あ、勉強ならいつでも教えますよ。あなたのような人なら俺の勉強時間を割いてでも」

「いえ」と綾は涙を拭って遮った。

「勉強は自分で頑張ります。それよりも、この依頼の続きをお願いしたいです」

そうだ。この依頼はここで終わりじゃない。そう思った小守はコホンと咳払いしてネクタイを直し、椅子に深く座りこんだ。

「そうでした。ここからが白河さんの本当の依頼ですよ。なんとなく想像は付くのですが、どのようなご依頼ですか？」

口調まで優等生になった小守がそう促した。

「そんな難しい話ではないと思うのですが」

椅子に腰かけた綾は、一度目まばたきをしてから、前にいる小守に訴えた。

「高梨さんとアポイントメントを取ってきてもらいたいです。一度でいいので」

羞恥心を脱ぎ捨てて、綾はすべてを告白する。

「解散にまでなってしまったことはいた仕方ないと思ってます。でも私は、高梨さんに会えたからこそ、今こうやっていろんなことを勉強できて、頑張っている自分に出会えた。高梨さんはただ音楽の世界に惚れ込んでみんなに伝えようとしてただけかもしれませんが、私は言いたいです。勇気や元気を分けてくれて、本当にありがとうございます」

綾の発言に、不満を呈したのは部屋の隅にいる夏美だった。

「え？　なんでそれだけなの？　だってあんた、高梨さんのこと追いかけるほど好きなんですよ？　だったら、正面切って好きだって

言いたいつてのが、本来の依頼なんじゃないの？」

綾はかぶりを振った。

「それはできません。だって、反則じゃないですか」

「反則？」と夏美がつつかかっていた。「反則ってなによ？」

「私は一ファンでなければいけないんです。ほかのファンの人だって、ヨシキさんのことが好きはずです。そんな中で、たった一人だけ幸せになるなんて反則、絶対に犯してはいけないんです」

好きだけれど告白は避ける。そんな葛藤におぼれる綾に小守が問いかける。

「それは本心ですか？」

「はい」

「俺にはどうも、そうは思えないのですが」

「どうしてですか？」

「あなたの言っていることはもっともらしいですし、一応筋が通っているように思えます。でも、俺は二回ほど高梨さんと会ってるんですよ。それに加えて昨日インターネットでとことん調べました。そこから考えると、どうも納得がいかない。なにかほかの理由で好きという気持ちを無理矢理ねじ伏せて我慢しているような、そんな気がしてなりません」

小守は、綾の意見を退けようとしていた。

「ほかにどんな理由があるって言うんですか？」

握りこぶしを額に当てて、しばらく考えを整理していた小守が、ふと顔を上げ、白河綾の心理を推察した。

「先ほど話してくれた、九条マリアさん絡みですよ。あの人はもう、この世にいないような気がしてならないんですが」

「えっ！」

夏美は思わず声を漏らし、そしてナボーナを床に落とした。

「な、なに言ってるんですか？ 変な冗談はやめて下さい」

綾は、なにをバカなことをといった顔つきで物を言い、小守を睨みつける。

「冗談を言っているつもりはありません。俺は本気です」

「なら本気で答えますけどね、私が九条さんになにかしたとでも思ってるんですか？ 人の命を奪うようなことでもしたと？」

「あつ、少し言い方が悪かったようですね」

小守はこの場しのぎといった感じの平謝りをした。

「どういうことですか？ ちゃんと説明して下さい」

「わかりました、では」

そう言って立ち上がり歩き出した小守は、壁にある蛍光灯のスイッチをぱちつと入れて部屋を明るくした。すっかり太陽が消え去り、暗くなってきたのだ。それを見た夏美が、一目散に窓へと駆け出し、先輩より早くカーテンを閉めきった。

明るくなった室内で、気合を入れ直した小守が席について語りだした。

## 喪失

「たった一人のファンが、絶対に幸せになつてはいけない。それが白河さん、あなたの考え方で間違いないんですね？」

「そうですね、それが？」

「だとしたらおかしいんですよ。どうやら白河さんはご存じないようなんで言いますけど、『羨望駅』にあるクマのぬいぐるみの店では今、あるトラブルが起きています」

「トラブル？」

「ええ。あの店に住んでいるおじいさんのお孫さん、つまり高梨さんが、そのおじいさんをどこかほかの家に移住させようとしてるんです」

「えっ、そんな」

綾は大きく目を見開いて驚いた。そんな話は聞いたことがない。

「どうしてそんなことするのか、ずっと考えていました。それがたつた今、白河さんの話を聞いてようやく筋が通りました」

綾と、ついでに夏美は、理解にまで及んでいない。

「一か月前から何度もおじいさんの店にやってくる高梨さん。ベストアルバムを出して活動を休止しているウルス。そして、あなたをそのビジュアル系バンド、ウルスに惹きこませた原因でもある九条マリアさん。ここまで言えば、もう分かりますよね？」

そういうことかと、綾はため息をついた。

「はい、度々すいません、九条マリアさんは確かにもういませんね」「えっ、あれっ？ 二人だけで納得しないでくださいよ！」

ピーピーと憤慨する夏美に、小守が真相を話した。

「インターネットにはな、ヨシキさんに最近、配偶者ができたと書いてあったんだ。つまり結婚したってことになる。その結婚相手はおそらく、九条マリア」

「えっ、じゃ、じゃあ、この女が本当の気持ちを言わないのって



「小守が夏美に向かって、うなずきを返した。」

「九条マリアが高梨ヨシキとくつついて、高梨マリアになってしまった。そんな幸せの場を引つ掻きまわすような真似はしたくない、つまり、ちよつとした心遣いからだろうな」

「……」

綾に反論の余地はなかった。

「ファンが好意を伝えちゃいけないのなら、九条マリアにだって該当する。いくら二人が高校時代の友達だからってファンはファンだ。ファンサイトまで運営し執着を抱くあなたならば結婚の話題を知らないはずがない。ゆえに、恩ある九条マリアを批判するようなセリフを吐くのはおかしい。そう思ったんです」

小守はすべての推論を言いきって、ため息をついていた。そんな彼にひとつだけ、綾は訊いてみたいことがあった。

「どうしてそんなにすらすらと、私の心が読めるんですか？」

小守はあくまで平静を装う。

「単なる状況証拠の羅列ですよ」

「私はこれから、どうすればいいんでしょうか？」

唐突に質問が切り替わった、

「一度会ってお礼を言いたいんですけど、それでも、会ってしまったら好きだって告白してしまう気がして。私、どうすればいいんでしょうか？ これ以上は、追及しないほうが利口なんでしょうか？」

「いや、それはその……」

本人の意思を仰ぐべきだと思っていた小守は、途端に言葉を詰まらせる。

「もし、学年一位の小守さんがどんな形でもいいから、私の稚拙な嘘を見破ってくれたなら、再度、ちゃんと依頼して会いに行こうって決めてたんです。だけどここに来てはまだ、決心が揺れ動いてます。やめたほうがいいんじゃないかって。忘れたほうがいいんじゃないかって」

膝をすりむいた子供のように鼻をすする綾。

小守はどうにもこうにも答えを出せない。

「教えて下さい！ 私はこれから、どうすればいいんですか!？」  
先ほど言った依頼をはねのけて、綾は身を乗り出して小守に懇願した。小守は両手を掴まれて、涙がとまる気配がない綾の瞳をじつと見つめる。彼は思わず、健気で愛らしい、まるでクマのぬいぐるみのような彼女に見惚れてしまった。

「お願いです……お願いだから……!」

徐々に力を失くしていった綾は、また椅子にもたれて脱力してしまった。まるで、すべての体力を使い果たしてしまったかのように、小守が一つの結論を口にしようとした瞬間だった。

「会いに行けよ、このバカ女」

呟いたのは小守ではなかった。部屋の隅っこでただ間食をしていた小生意気な少女、氷川夏美だった。

「さつきから聞いてりやあチンタラチンタラ言い訳ばっか垂れやがつて！ 好きなら好きって正直に言っちゃえばいいだろうが！ お前はなんのためにここに來てんだよ!」

夏美は、小守でさえ初めてみる恐ろしい形相になり豹変していた。泣きながらその顔を見つめた綾は、夏美から目を離せなかった。

「いいか！ 恋愛には好きか嫌いしかねえんだ！ 恥ずかしいとか、結婚してるからとか、利口だとか、細かいことは関係ねえんだよ！ 高梨との予定くらいこっちでいくらでも合わせてやるから、いいからさっさと告白しちまえばいいだろ!」

綾の隣まで来て夏美はそう説教をした。

「やめろ夏美！ これは白河さん問題だ!」

「うるせえな！ 女の恋愛に口出しすんな！ ガリ勉野郎は黙ってる!」

「がっ、がががっ……!」

小守はあり得ない後輩の言葉に、意識を飛ばしかけていた。

「ともかくだ！ こっちはお前が高梨を好きだって前提で動いてん

だよ！　いまさら依頼を取り消すなんてバカなこと、すんじゃねえぞ！」

「はっ、はい！」

ほとんど強制的に同意させられた綾は、涙を枯らして返事をした。夏美は満足したように「よし」と呟くと、また部屋の隅でぱくぱくとナボーナをひとつ、平らげた。

「あっ、えっとじゃあ、高梨さんが会える日付と時間が決まったら、ここに連絡して下さい。必ずや、習い事を休んで予定を合わせますので！」

意外と元気な綾は、座ったまま丁寧に礼をして部屋から去っていった。

小守の前の机には、白河綾の携帯番号が書かれた紙が置かれている。しかし失神しかけている彼は、まったくもってそれに気付かず、白目をむいてままだらしく呼吸していた。

## 解答屋

ふつと意識を取り戻したその瞬間に曜日が一つ動き、大安の水曜日になっていた。そう結論づけるのが、理論的、物理的、心理的思考から導き出すと最も合点がいくようだ。

パシッと軽めに頬をたたいてみる。

やわらかい感触とつんとした程度の低い痛みがやって来て、じんじんとした。

ああ、一体なにがあっただろうか。俺は丸一日、気絶でもしていたのだろうか。

どうやらそれが一番、小守悠介にとって納得のいく説明だった。いつの間にか授業中、それに日が差し込んでくるのでまだ昼前のような。物理の先生が生徒たちに向かって一方的な授業を展開している。

去年からずっと思ってたこと。この先生の説明は絶対に生徒受けしないということ。

物理と数学が根本的な部分でリンクしてるって解説は別に間違っちゃいない。どっちも自然科学の一分野だからだ。でも考え方や導き方が少しずつ異なってくるんだよ。それをわざわざ混ぜこぜにしたような授業で進めていつちゃあ、そりゃあ誰もついてこれない。俺が教壇に立って説明した方が少しは役に立つと思うんだけどな。

小守は、このどうしようもない先生を心の深間で蹴散らした。

「教科書三十七ページにある、このホームベースみたいな形した五角形の重心問題、わかるやつ、前に出て解いてくれ」

しーん。

「おい誰かいらないのか？ 手を上げろ」  
静寂。

誰かがペンを動かす音すら聞こえない。

このクラスはあまり優秀なクラスではない。それに物理を専攻し

ている人間は一人もいないので、ハナから物理学に興味のない奴が多い。

ただ、物理ではメジャーな重心問題の解法すら満足に教えられない先生なんて、生徒たちからしてみれば一種の拷問に匹敵する。まわりくどい説明なんかしなければ寝る奴なんていないだろうし、誰にだって理解できて答えられるはずだ。式も短いし。

「じゃあおい、『解答屋』の小守悠介。どうせ暇だろ？　こっち来て解け」

ひげ面の先生が手招きしている。小刻みに。

ああ、どうして一番後ろにいる俺に順番が回ってくるんだ。俺だって物理を専攻してるわけじゃないし、『解答屋』なんて職種に就いた覚えもない。

「ちよちよいと説明も加えてくれよ。どの公式をつかってどんな考え方をしたのかもだ」

はいはい。

頼りは生徒だけってね。

小守は教科書を持って教壇に向かい、チョークでさらさらと解法を書いていった。一糸乱れぬその文字、思考、解法、そして芸術的なリズムを刻むチョークの音。すべてが完璧でムダな動きが存在しない。

そして幻惑。

冷静でありながら、残像を見せるほどの気迫を生徒たちに見せつける。

三年C組の生徒たちは、類い稀なる天才の軌跡を目の当たりにしていた。

小守がチョークを放り投げる。ついでに先生の座をも奪って懇々と諭す。

「重心を求めるにはこの五角形のまま考えてはいけません。これは俺が引いた補助線、つまりここ。これによって三角形と四角形に分割して解いていきます。四角形のほうならば、重心Wは言わずとも

知れたこと、ここですね。つまり残った問題はこちら、三角形の重心の求め方となります。これは面積比を考慮した、いわゆる逆比という考え方をするのですが」

そのとき、ピリリリと携帯電話の音が鳴り響いた。

「おい誰だ！ 携帯電話は禁止だってあれほど、校長が言って、ただ……」

物理の先生は音源に近づいていく。近づけば近づくほど犯人が明確になる。

「はい、小守ですが？」

教壇の上に立ち、携帯電話を片手に平然と話し始める小守。

物理の先生は驚愕して、さらには当惑して、声を出せずにいる。

「はい、はい。え、お孫さんと一緒に解体業者の人が来た？ じゃあそれって、おじいさんの土地を売り払おうとしてるってことですか？」

その会話内容が重く、さらに声を出せなくなる物理の先生。

席に座る数十人の生徒たちもその会話に聞き入っている。

「その解体業者の名前だけ覚えておいてもらえますか？ はい、今から向かいますので、お願いします。はい、あとですね、できればお孫さんの連絡先もお願いします。はい。いろいろとすいません」

通話を終えた小守は、携帯電話をポケットにしまった。

「先生」

「え、あ、なんだ？」

「用事が出来たので早退します」

物理の先生を一瞥して、小守は自分の席へと駆けだした。机の横にひっかけてあった鞆にすべての道具を落とし入れ、後方の扉から飛び出していった。

## 小守の追及

「しかしまあ……、まさかいきなりお会いできるとは、光栄です」  
上司をよいしょする部下のような丁寧口調になり、小守は目の前の人物に頭を下げた。

「何日も待つのは面倒だろうと思ってね。今日はおじいちゃんにも覚悟してもらってたはずだから、せっかくだし自分から出向いただけだよ」

言つて、コーヒーカップを傾けているのは孫の高梨だ。清々しいほどの短髪と黒縁眼鏡がよく似合っている。飲んでいるのはエスプレッソコーヒー。

クマのぬいぐるみの店に直行した小守を待ち受けていたのは、奥の和室でくつろいでいた高梨だった。小守がアポイントメントを取りがつてしていると知り、アルバイトもなかったため待っていてくれたのだ。おじいさんは孫を嫌って二階でふんぞり返っていた。

お店兼自宅であるおじいさんの店で長話するのは失礼だと思った小守は、羨望駅前のレストランで、街ゆく人々を見物しながら話し合いを開始していた。

「で、僕になんの用かな？」

「用があるにはあるのですが、その前に少し、先ほどの件についてお話しませんか？」

「先ほどって？」

「あのお店についてですよ」

小守がすらっとした長身の高梨を見上げた。

「あはは。君はあんなおじいちゃんのことを良く思ってるらしいね。高校生の、しかも女の子と夕食を共にすることを承諾しちゃうような人なのに」

「ああ、それには理由があると思うんです」

「コーヒーに口をつけようとしていた高梨が不満そうな顔で聞き返す。「理由？」

「簡単な話ですよ。たとえ高校生だろうとなんだろうと、この地で人脈を作っておけば少しは高梨さんに抵抗できると思っていたんですよ。お孫さんのことを極端に嫌うおじいさんでも、間接的にその意思をあなたに伝えることができる。ここから動かないぞ、という堅い意思を」

高梨が啞然としている。

小守がその隙に、よく泡立ったカプチーノコーヒーをすすった。  
「それくらい、高梨さんなら気づいていると思っていたのですが」  
「あ、ああ。まあでも、別になんとなくだったから」

ようやくコーヒーに口をつけて、高梨はそれを慎重に受け皿へと戻した。

「しかし、どこに連れて行くつもりですか？」

「おじいちゃんから聞いてないの？」

「ラジオの音でかき消したから知らない、言い張ってました」  
予想外だったようで、高梨は少し視線を泳がせた。

「なにせ、あなたのことを相当嫌っていますからね。無理もないでしょう。お孫さんであるあなたのフルネームすら、まともに教えてくれない有様で」

エスプレッソのほどよい渋みが口の中に広がる。高梨は慌てて、ポーションカップからミルクを注ぎ入れた。

「僕の本名？ そんなものの気にしてどうするの？」

「別に気にしているわけじゃないですよ。ただ、観察対象としてフルネームくらいは知っておきたいなど。いわゆる好奇心です」

「ああ、そうなの」

「失礼します。鮭のムニエルをお持ちしました」

派手なウエディングドレス風の服を着た日本人ウェイトレスが応対していた。それを頼んだ小守が軽く手を上げて合図する。料理を置いたウェイトレスは銀のお盆を胸元に抱え、「ごゆっくりどうぞ」



と挨拶をして店内に消えていった。

「鮭のムニエルって初めて食べるんですけど、これおいしいんですかね？」

失礼にもほどがある物言いに、むっとした高梨がまくしたてる。

「ムニエルっていうのは魚の調理法の一つでね、今じゃ日本でも当たり前のように使われてる調理法だけど、もともとはフランスから来てるものなんだ。魚の切り身に塩コショウで下味を付けて、小麦粉とかの粉をまぶしてバターで両面をよく焼くんだ。そして最後にレモン汁をかける。その鮭も、きつとこんな感じで作られてるはずだよ」

嫌というほど饒舌。

小守がふと問いかける。

「お詳しいんですね、高梨ヨシキさん？」

「あれ、さっきは僕の本名知らないって」

「それがですね、最近こんなものを手に入れたんですよ」

小守は鞆から一枚のCDを取り出した。

「久しぶりに音楽でも聞こうと思ってまして、ここに来る途中で買ったんですよ。ウルス・ザ・ベストっていうアルバムなんですけどね」  
テーブルの上でくるとその向きを変え、小守はさらに続ける。

「この中央にいるヨシキっていう人になんとなく似てる気がしたんですよ。それで思わず口にしてしまいました」

高梨が訝しげ表情をして小守を見やった。

「なんか、すごくわざとらしくないかな？」

「でしょうね」

料理を前にしても、小守はいつさい手を付けようとしなない。

「別に本名が割れたところで、なんになるって言うの？」

「じゃあ、これはあなただと、そういうことでいいんですね？」

高梨はわざとらしくお手上げのポーズをとって「そーだよ」とため息をついた。

「随分と変わって見たんだけどね。わかる人にはわかるってことな

のかな。世の中って本当に恐ろしいよね」

「同感です」

小守は心の底から同意した。

そしてさらに、

「解体業者の真似事までしておじいさんを追い出そうとするなんて、世の中末恐ろしくてやってられませんかよ」

力強くそう言った。

「どういうこと？」

「ここまで来るとぼけるんですか、高梨さん？」

小守には自信があった。

この人がおじいさんを騙そうとしているという、絶対の自信が。

「とぼけるものにも、僕は実際に業者の人に頼んだし、解体の金額を査定してもらったために、今日ちゃんと来てもらったんだから」

「何人いらしたんですしたっけ？」

「二人だよ。必要ならばおじいちゃんが証言してくれると思うよ」

高梨は当然のことをしたまでだと言った口調で、正々堂々と告げた。

「まさかとは思いますが、この二人ではありませんか？」

ぴしっと伸ばされた人差し指。

それが指し示す真実。

一か八か、確かめてみる価値はあるはずだ。

「このCDジャケットには、あなたがウルスの活動を休止する以前から付き合っていたはずの二人組の仲間がいらっしやいますよね？ この二人に頼んで、査定まがいの行動をとってもらったただけなんじゃないですか？」

CDジャケットにはヨシキだけでなく、二人の仲間もポーズを決めていた。

「あははは。面白いことを言うんだね。なんでそんなことがわかるんだい？」

吹き出し笑う高梨に、ひしひしと差し迫る慧眼。

小守の解答。

「あなたが、生粋のおじいちゃんっ子だからです」

「ん？ なんだって？」

コーヒークップを揺らしながら、高梨は聞きそびれたような素振り。

「このまま解体作業が進むとは思えないですよ、俺には」

「へえ、是非その話を聞きたいね。一体どういうことなの？」

高梨はいまだ余裕な顔をしてコーヒーククの香りを楽しんでいる。いくら苦くてもそれがまた大人の嗜み、ミルクとエスプレッソが織り成す二重奏。

「バンド名の『ウルス』という名前は、あのおじいさんからもらったものでしょう」

「どうしてそう思うの？」

「あれだけクマ関連が置かれているお店はそうそうありませんし、あなたがバンドを組む際に、祖父に喜んでもらおうと思って『ウルス』と名付けたんじゃないかと」

「なるほどね。で？」

「祖父のことが嫌いならばそんな配慮をするはずありません。好きだからこそウルスと名付けた。祖父思いのあなたが、嫌がる祖父を無理やりあの店から追い出そうとするなんて、不自然です」

「それで解体業者は偽りだってこと？」

「ええ。あのお店はあなたの祖父にとって宝も同然。それを守りたいというのが祖父の願いであり、あなたの願いでもあるはずですよ。高梨がCDに目線を落としたまま呟く。

「でもさ」

「はい？」

「おじいちゃんに反対されてでも連れていきたい理由があったらどうする？」

「例えばどのような？」

「あの家さ、本当にぼろぼろで今にも崩れそうだったでしょ？ お

年寄りが一人暮らしするのには危険すぎるんだよ。だから一緒に来てほしいと思った、とか」

「それはおいしいさんを連れていく口実ですよね？」

ナイフとフォークを構え、小守は皿に乗っかっている鮭を切り分け始めた。

「口実？」

「はい。本当の理由はほかに存在するということです」

「例えば？」

そうですね、と小守が思索する。

「例えば、結婚相手が見つかったその報告をしにきたと同時に、同居を祖父に勧めた。なんてのはいかがでしょう？」

その返答に高梨は目を見張った。

「一人身の祖父を案じるのは優しいあなたなら同然。でも、昔から夢ばかりを追い続けていたあなたは祖父に嫌われていた。アーティストになるという夢を追いすぎて、祖父とはもうほとんど勘当状態にあったのではないかと」

高梨はじつと、小守の表情をうかがったまま口を開かない。

「インターネットであなたのことを調べまして」

「そう、だったんだ」

「結婚する事実と、祖父から過剰なまでに嫌われている現状。さらには、是が非でもその祖父をどこかに連れていきたいというあなたの真意。この三点を支柱とした情報からこのような結論を導きました。少し、想像的な部分もあるんですけど」

そしてようやく、小守は鮭のムニエルを咀嚼する。

「あっ、おいしいですねこれ」

「だろうね。家でも簡単に作れるレシピだけど」

「高梨さんは食べないんですか？　好きなフランス料理でしょうに」

小守の声を聞きながらエスプレッソを飲み干した高梨は、ふと視線を駅前通りに移した。めまぐるしく進む時に急かされて街を移動

する人間に、目を奪われていた。しばらくその姿を見つめていた小守だったが、首を捻り、一緒になって人並みに意識を向けていた。

## 彼の夢

「……活気がないと思わないかい？」

突然、小守はそんな言葉をかけられた。

「なにがです？」

「この国っていうべきか、この世界って言うべきかわからないけど、活気がないんだよ。外を歩いているとね、いつもそう感じるんだ」  
通りでは、車が行き交ったり、人がすれ違ったりしている。

だけどその中に愉快的な会話なんてほとんどないのだ。

車が小汚い空気を吐き出している。携帯電話で業務連絡ばかりするOLがいる。親に厳しくしつけられて泣きじゃくる子供がいる。生きるために有意義なことばかりして、人間としての本来の姿を見失っているように高梨には見えている。

「だから一発、僕がこの世の中にどんと飛び出して活気を与えてやろうと思った。僕が音楽をやりたいと思ったきっかけは、そんな些細な理由だったんだ」

それから高梨は、ゆつくりと時間をかけて語り始めた。

音楽が、世の中を動かすのに最も最適で、一番の近道だと思って  
いた。

まだ高校一年生だった頃の話だ。

幸いにも彼は、友人から歌声を賞賛され、自分には音楽の才能があると思つてまずはギターに手をつけた。

本当にゼロからのスタートだった。

そもそもギターを買うお金がなかった。悩んだ挙句訪れたのは、『羨望駅』近くにあるおじいちゃんの家だった。するとおじいちゃん、笑顔でお金を貸してくれた。

「でも大学生になったら、自分で稼ぐんだぞ？」

優しいおじいちゃん、彼はよく懐いていた。

ギター、ピック、アンプ、シールド、チューナー……。

とにかくありとあらゆるものをかき集めて自宅で練習を始めた。ギターを弾きならすとわくわくして、よく未来の自分を想像した。歓声に沸くドーム状の暑苦しい会場で、もっと熱くなれと促す自分の姿があった。だから、その夢を叶えるために一生懸命練習に励もうとした。

でも応援してくれるのは離れた家に住むおじいちゃんだけで、両親は違った。

「ガチャガチャうるさい！ 他の場所でやりなさい！」

母に、ギターを初めて一時間もたたないうちにそう咎められて、彼は家での練習を諦めた。

ならばどこでやればいいのだろうか。

その答えは単純明快で、たった一つしかない。学校だ。

彼が通っていた高校には吹奏楽部やブラスバンド部や軽音楽部など、音楽関係の部活はなかった。野球部やサッカー部のようなメジャーなものはあったが、予選の第一試合で敗退してしまう弱小チームばかりで、部活には無頓着な学校だった。どの部活も、同好会程度の内容でしかないのだ。

だからだろうか。放課後、学校の空き教室でギターの練習ができないか担任に訊いてみたところ、あっさりと校長の許可が下りた。「つまり、軽音楽部を作りたいってことだろ？ やってほしいらしいから、適当に頑張ってみなよ」

担任にそう後押しされて、彼は次の日からギターを背負って学校へ通うようになった。

放課後に一人で部室に足を運んで練習した。

がむしゃらだった。教本だけでは理解できず、学校にあるパソコンを駆使して幾度となく調べた。つりそうな指を何度も開いて弦を押さえつけて、ようやく完璧な音を出せた。

感動した。

ギターってこんなにもいい音を出すんだ。

生演奏はきつと世の中を変えてくれる。練習すればするほどバリエーションが増えていつかソロのアーティストとしてやって行ける日が来る。

そう感じて、勉強を放ってまでギターに執着していた。いつも気づけば夜だった。

それから数カ月がたったある日のことだ。

日課となっているギターのチューニングを終え、肩慣らしにパワーコードをリズムよく掻き鳴らしていると、誰かが部室の扉をノックする音がして、演奏をとめた。

そこにいたのは、ギターを持った二人の高校生だった。

「俺らも一緒にやらせて下さい！」

夢は伝染病なんだなと、彼はこのとき感じた。

学年が一緒だったということもあり、三人は仲良くギターの練習に精力を注いだ。

あとからやってきた二人はギターやドラムの経験者らしく、既にバンドを組めるほどの実力を兼ね備えていたのだが、ボーカルが見つからずに困っていたらしい。高梨は自分がボーカルを務めるから一緒にバンドを組まないかと持ちかけて、ついに三人はバンドを結成した。

それでも、折角おじいちゃんからもらったお金を無駄にしたくなかった。高梨は二人からギターを教わっていた。そんなとき、ふと彼は呟いた。

「クマに由来するバンド名がいいなあ」

そして名づけられたのは『ウルス』だった。フランス語でクマを意味する言葉。

名付けたのは、

「よう。いい名前だろ？ あたしがつけてやったんだぜ？」

なんの断りもなく部室にやってきた一人の女子生徒だった。

しかも軽音楽部の誰も知らない、赤の他人。

「この学校つまんねえよなあ。校則厳しいくせして部活は総じてク



ズだ。お前らには期待してる。うん、ウルスっていいだろ？ な？  
なっ？」

丸め込む形で問いかける女子生徒の名前は、九条マリアだった。  
呼んでもないのに毎日部室に来ては、監督さながらに野次を飛ばす男勝りな女性。

実際にバンドを組んだのはいいが、ドラムがない。三人とも出資するお金がなくて困り果てていたところに九条が言った。

「じゃあ、あたしがドラム提供してやるよ」

三人は言葉を失ったが、一週間後、九条はドラムを部室へと運んできた。

どうやら本当に三人を応援しているらしい。

金持ちなんだろうなと高梨は思っていた。

でも違った。

その翌日、昼休みに廊下で九条とすれ違ったとき、高梨は軽く挨拶を試してみた。

「あ、九条さん」

「……」

九条はそれに気づかず、彼の横を通り過ぎていった。

その日から、九条は部室に現れなくなった。

またも昼休みに廊下で声をかけてみるが反応がなく、不審に思った高梨は放課後、部活動を休みあとをつけてみることにした。

そしてたどり着いたのは小さなアパートだった。年季の入ったこげ茶色の住宅だ。

どうやってドラムを手に入れたのか。それが不思議なほど小さな家。

なにかただならぬ事情を察した彼は、九条が入っていたアパートの二階にのぼり、インターフォンを押した。

出てきたのは母親だった。その母親に事情を話すと、むっとした顔を作った。

「あの子、家のお金盗んだのよ。それがそのドラムに変わったんだ

と思う。理由はどうしても話してくれなかったけど、まさか音楽機材を買うためだったなんて……」

衝撃だった。

まさか親のお金に手をつけているなんて思わなかったから。

必死に謝ってみたが、それはあとの祭りだ。

九条の母親は、「私の娘がやったことだから」と高梨を咎めることもせず扉を閉めた。高梨はその場でしばらく放心状態だったが、次第にとぼとぼ歩きだして帰路についた。

なんで。

どうして。

疑問のフレーズが頭の中で渦巻いて、練習に身が入らなくなった。そんな日々がしばらく続いたとき彼は決心した。

直接、彼女の口から聞くしかない。

放課後に九条の教室の前で待ち伏せして捕まえた。抵抗はしなかったが一応その腕を掴みとり、誰もいない屋上へと連れていった。どうして親のお金盗んでまでドラムを買ったのか尋ねた。

「どんなに学校がつまらないからって、そこまですることないんじゃないの？」

返事はいたってシンプルだった。

「本気だったから」

「え？」

「本気でアーティスト目指してるって、お前言ってただろ？」

「それだけ？」

「んだよ、不満かよ！」

「いや、そうじゃないけど……」

返事に困った高梨に、九条は言った。

「あたしがウルスのファン一号になってやる。だからお前も、もつと本気でアーティスト目指せよ。お前たちを応援したいだけなんだよあたしは！」

そう言ってそっぽを向いた。

「約束するよ。約束するけど」

「けどなんだ！」

「本当にそれだけ？」

「え？」

高梨はそう繰り返して、九条の顔を覗き込んだ。

「本当にそれだけなのかなって」

「それだけだよ！　ほんとと鬱陶しいなお前、もう帰るからな！」  
力強い足取りで九条は屋上から去っていった。

それから更に数年が経ち、高梨は大学生になった。音楽で世の中を活気づける。そんな目標から、激しいパフォーマンスを要するビジュアル系のバンドを目標にしていた。相変わらず音楽は続けたが、そのせいでいくつか単位を落とし、親にこっぴどく叱られる羽目になった。

それでも、おじいちゃんならわかってくれる。

そう思っておじいちゃんの家を訪ねてみたのだが、

「音楽やってて成績が下がっただ？　アホ拔かせ！　男のくせに下らない化粧なんかして出しゃばりおって！　さっさと音楽なんぞやめて就職しろってんだ！」

おばあちゃんはその暴挙をとめにかかっていたが、おじいちゃんの怒りは収まらず、高梨は逃げるようにその家を出ていった。

あのときのような優しいおじいちゃんは、もうそこにはいなかったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5258n/>

---

探偵クン    ~ looking for the bear ~

2010年10月8日11時38分発行